

# Kyoto University Executive Leadership Program

Lecture outline

## 2023

京都大学

エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム

講義概要





未来を創るために、  
ものごとの  
根本を深く知る。  
未来の源泉は、ここにある。

## contents

総長よりご挨拶 湊 長博

### 前期

#### 人文科学

- 赤松 明彦 [インド哲学]
- 芦名 定道 [キリスト教学]
- 上原 麻有子 [近代日本哲学]
- 佐伯 啓思 [現代文明論]
- 山本 淳子 [平安時代の文化・文学]

#### 社会科学

- 広井 良典 [公共政策]
- 丸山 里美 [社会学]
- 矢野 誠 [ミクロ経済学]

#### 自然科学

- 小川 順 [応用微生物学]
- 金出 武雄 [ロボット工学・人工知能]
- 鎌田 浩毅 [地球科学]
- 坂口 志文 [免疫学]
- 滝田 順子 [小児がん]
- 橋本 幸士 [素粒子論]
- 平田 晃久 [建築学]
- 森 和俊 [分子生物学]
- 山極 壽一 [人類学、靈長類学]

#### 複合領域

- 神谷 之康 [ブレイン・デコーディング]
- 藤原 辰史 [食と農の思想]
- 明和 政子 [発達心理学]

#### 芸術

- 杭迫 柏樹 [書道]
- 千 玄室 [茶道]
- 平川 佳世 [西洋美術]

### 後期

#### 人文科学

- ウスピ・サコ [空間人類学]
- 鈴木 晶子 [教育哲学]
- 東長 靖 [イスラーム研究]
- 西平 直 [教育人間学]
- 速水 洋子 [文化人類学]
- 松山 大耕 [禅]

#### 社会科学

- 石井 美保 [人類学]
- 西谷 祐子 [国際家族法]
- 劉 德強 [中国経済]

#### 自然科学

- 伊藤 憲二 [科学技術史]
- 伊藤 美千穂 [生薬学]
- 鹿島 久嗣 [人工知能]
- 北川 進 [無機化学]
- 田村 恵子 [緩和ケア]
- 土井 隆雄 [有人宇宙学]
- 益田 玲爾 [魚類心理学]
- 湊 長博 [免疫学]
- 渡邊 大 [生体情報科学]

#### 複合領域

- 塙瀬 隆之 [コミュニケーションデザイン]
- 浅利 美鈴 [環境教育論]

#### 芸術

- 池坊 専好 [華道]
- 金剛 永謹 [能楽]
- 樂 直入 [樂焼]

※各ページに掲載されている肩書きは  
2023年4月現在のものです

## concept

### 務本之学

「務本の学」とは、即ち「本(もと)を務むの学」。先の見えない複雑な世界だからこそ、枝葉末節ではなく、本質を理解する学問、務本の学が必要になります。

自然科学

社会科学

複合領域

芸術

人文科学

## Greeting

# 京都大学 ELPの勧め

MINATO Nagahiro

京都大学  
総長  
湊  
長博

京都大学Executive Leadership Program（京都大学ELP）は、現在ビジネスや行政を始め多様な社会の第一線で活躍し、将来各界のリーダー人材として我が国の発展を担っていくことが強く期待されている皆様を対象に、学術・文化・芸術の都である京都の地で、本学を始め斯界を代表する当代第一人者による講義と直接対話を介して、幅広い知識と素養を体得していただくためのリーダーシッププログラムです。

本プログラムは、京都大学構内の由緒ある橘会館（約110年前に竣工された旧帝国大学総長官舎）で行われ、2015年の開始以来昨年度までにすでにのべ100名を超える方々が受講参加され、非常な好評をいただいております。京都大学ELP受講者には京都大学総長より修了書を授与させていただくとともに、京大ELP俱楽部（同窓会）にお入りいただいています。京大ELP俱楽部では、同窓生がプログラム修了後も定期的に連絡を取り合い、特別講義や多様な催しを通して、異種業界間での交流や情報交換に大いに役立っているとうかがっています。

さて、今や企業はCorporate Social Responsibility (CSR)を求められ、Environmental, Social and Governance(ESG)が企業投資の重要な指標とされる時代です。とりわけ複雑さを増しつつある国際社会のなかで、経済を始め様々な社会活動の健全なグローバル展開のためには、広汎な知的文化的な素養に裏付けられた人と人との円滑なコミュニケーションの力は、一層その重要性を増していると言えるでしょう。

18世紀の産業革命以降、科学と技術の急速な発達により世界の人々の生活は大きな進歩を遂げ、21世紀の今日、先進諸国ではIoTやAIなどの新技術に

より超スマート社会の実現を目指す第4次産業革命の時代に入っています。他方で20世紀末から、世界の気候変動と共に伴う大規模自然災害、地球環境破壊と生命多様性の危機、人間社会での多様なレベルでの格差と分断の増大や食糧・人口問題、さらには相次ぐ新興感染症とパンデミックなど、文字通り地殻レベルでの課題が顕在化してきているのも事実です。

これら諸課題の要因自体は科学によって問うことはできますが、それにより容易に解決に至るとは考えられません。英国の科学哲学者J.Ravetzらは、現代世界が直面している大きな問題は、事象自体の高度の複雑性とそれに係る利害の多様性によって特徴付けられ、「科学(Normal Science)によって問うことはできるが答えることのできない」領域に属しているとして、ポスト・ノーマルサイエンス(PNS)領域と呼んでいます。

先般来の新型コロナウィルス感染症のパンデミックも、まさにPNS領域の問題と言えるでしょう。ウイルスの



特性や感染様式、宿主の免疫応答と病態発生機構などに係る科学的知見は急速に蓄積され、ワクチン開発もかつてないスピードで進められました。しかしこれらが人々の社会活動全般に統一指針を与える状況には必ずしもなく、その背景には、地域によって異なる社会習慣や宗教、政治体制、他方では様々な社会活動や多様な職業によって異なる利害など、多くの要因が複雑に関係しています。

この混乱は、ポスト(あるいはウィズ)コロナ時代にも、解消されるとは考えにくく、むしろ先鋭化する危惧さえあります。さらに今般のロシアのウクライナ侵攻によって、世界が新たな分断と抗争の時代に入っていくのではないかという不安と懸念が広がりつつあると言えるでしょう。

ビジネスや行政の世界において、複雑で混迷を極めつつある地球社会の中でこれからリーダーシップを取っていく人材には、自らが属する立場の直接利

害に加えて、実に多様な観点からの知識や理解が要求されることになるでしょう。人口減少と超高齢化の進行が避けられない我が国で、ビジネスを含め新しいグローバル展開を進めていくに当たっては、学術・文化・芸術などに広い見識と理解をもったリーダー人材こそが今求められているのではないかでしょうか。

京都大学ELPが、来るべき新時代の幅広い素養と知識を備えた社会のリーダー人材の要請に、そして何よりも受講される皆様の知の喜びと新たな出会いに、少しでも貢献できることを心から期待しています。



Category  
人文科学  
01  
前期

# 寛容であるとはどういうことか

AKAMATSU Akihiko

ヒンドゥー教を通して見る  
多様性と寛容

## 講義概要

インドでは、紀元前500年頃から様々な宗教が共存してきた。そして原理主義が広がりを見せる現代においても通常は平穏に共存している。このような状況は「インド的寛容」と言われる。しかしこの「インド的寛容」は、他者の容認ではなく(もちろん排除でもなく)、単なる不干渉の態度だとも言われる。あるいは相対主義と言われることもある。相対主義はローカルな価値の多様性を積極的に認めるものであるが、その境界では干渉が生じ、対立が生まれるだろう。しかし価値が重層するインド社会では、その干渉が意図的でない限り対立は通常は生じない。本講義では、この「インド的寛容」についての様々な言説や事例の検討を通じて、寛容であることの意義を考えたい。

## 赤松 明彦

京都大学 名誉教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

寛容でありたいと思う。不寛容であることがあたかも正義であるかのような言説が横行し、容認と排除の単純な二項対立によってしか世界のあり方が語られないような現代において、寛容であることは如何にして可能か。不寛容の時代にあって、どうすれば寛容であり続けることができるのか。寛容であることは、社会的リーダーにとって不可欠の徳目である。すなわち、社会的強者こそが寛容でなければならないのであり、それこそがリーダーの矜持というべきものであろう。インドでは、古代から、「弱肉強食」は非人間の原理とされてきた。そのインドでも昨今は不寛容の言説が横行している。眞に多様性を認め合う社会の実現のためには、寛容の精神こそが不可欠である。

### Profile

1953年京都府宇治市生まれ。1972年京都大学文学部哲学科入学。1981年、フランス政府給費留学生として京都大学大学院文学研究科からパリ第3大学第3期博士課程に留学し、1983年に同大学でインド学における博士号を取得した。帰国後、京都大学人文科学研究所助手を経て、1987年から九州大学文学研究科助教授、同教授。2001年～2018年京都大学大学院文学研究科教授。その間、2010年4月～10月文学研究科長・学部長。同年10月～2014年9月京都大学理事・副学長(学生担当)。2018年3月定年退職。同年4月～2023年3月京都大学白眉センター長。京都大学名誉教授。

著書に、『ヒンドゥー教10講』岩波新書(2021年)、『インド哲学10講』岩波新書(2018年)、『バガヴァッド・ギーター:神に人の苦悩は理解できるのか? (書物誕生—あたらしい古典入門)』岩波書店(2008年)、『楼蘭王国:ロップノール湖畔の四千年』中公新書(2005年)。サンスクリット原典からの翻訳書として、『古典インドの言語哲学 1、2』東洋文庫(1998年)など多数。

## 講義概要

人権思想は「近代」の思想的遺産であり、1948年に国連で採択された「世界人権宣言」（「人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利とを承認すること…」）からもわかるように、現代世界において広く共有されている。しかし、ポスト近代とも言われる現代の思想状況においては、「近代」の徹底的な問い合わせが求められているのと同様に、人権思想も根本的な問い合わせを必要としている。

本講義では、人権思想の問い合わせについて、現代日本の状況を念頭にキリスト教（近代の人権思想の源泉の一つ）との関連から論じてみたい。これによって、欧米諸国に比べ人権思想の具体化において立ち後れているという現代日本の状況が改めて問題化するであろう。

## 芦名 定道

関西学院大学神学部 教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

「人権」をめぐる問題（たとえば、LGBTQ+など多元的社会におけるマイノリティの人権、さらには人間以外の生命の生存権）について議論を深めることによって、現代世界が直面しているさまざまな行き詰まりに対して、重要な示唆を得ることが期待できる。とくに、現代日本においては女性や子どもという人権としては基本的とも言うべき事柄について解決すべき問題が存在しており、近代的な民主主義の確立のためにも、人権思想の深化が必要である。

### Profile

1956年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程（キリスト教学）単位取得退学。京都大学博士（文学）。京都大学大学院文学研究科教授（キリスト教学担当）を経て、現在は、関西学院大学神学部教授。  
著書に、『自然神学再考 近代世界とキリスト教』（晃洋書房 2007年）『近代日本とキリスト教思想の可能性 二つの地平が交わるところにて』（三恵社 2016年）など。

Category  
人文科学  
03  
前期

# 「物となつて見、考え、行う」哲学

UEHARA Mayuko

ひもとき、世界を再考する  
京都学派の技術知を

## 講義概要

「哲学」という学問は、日本では近代の黎明とともに西洋哲学を翻訳により導入することで開かれた。1930年代早くも、西洋最先端の哲学に決して引けを取らない、日本独自の哲学的立場を確立するに至ったのである。京都学派はその役割を担う代表的な知の集団であったと言える。講義では、学派の思想基盤となった西田幾多郎の哲学に焦点を当て、西田による「物を作る」ための技術論を紹介する。また、準備している課題は次の3つである。1. 西洋近代の哲学的パラダイムの乗り越え、2. 人間関係と社会・環境・世界の多様性に基づく西田的技術知の内実、3. 物作りの現実。「物となつて見、考え、行う」哲学は、今後の私たちの世界に何か貢献し得るであろうか。受講される皆様とともに考えてみたい。

## 上原 麻有子

京都大学大学院文学研究科日本哲学史専修 教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

京都学派や西田の哲学が、経世済民であるとは言い難い。しかし1930-40年代、日本が完全に世界に組み込まれた現実のもと、哲学者たちは個人と全体(社会・環境・世界)の複雑に入り組み、矛盾の内在する関係性を、そういうものとして論理化した。あの昭和の歴史はまだ現代の社会・文化の土台としてリアルに生き続けている。パンデミック、地球環境の激変等により、私たちの世界観は大きく変わろうとしている。技術知は、当時の哲学者たちの予測を超えて、私たちの生活に幸福と危険の計り知れない矛盾をつきつけている。マニュアルはもう通用しない。しかし、やはり世界変革の歴史を生きた彼らの哲学は、それを更新し続ける思考の深め方、知恵を提供してくれるのではないか。

### Profile

1994年、パリ第7大学テキスト文献学部修士号取得。2004年、フランス国立社会科学高等研究院博士号(哲学・翻訳学)取得。2005年、フランス大学助教授国家資格取得。2003年-2007年、リヨン第3大学外国語学部日本語学科任期付講師・研究員、および非常勤講師。2006年-2007年、ル・アーブル大学国際学部非常勤講師。2007年-2010年、明星大学日本文化学部言語文化学科准教授、2010年-2013年、同大学人文学部日本文化学科准教授を経て、現職。専門は近現代の日本哲学、翻訳学、女性哲学。

2012年より*Journal of Japanese Philosophy*(ニューヨーク州立大学出版)編集長。2015年より西田哲学会理事、2021年より同学会編集委員長。2016年よりInternational Association for Japanese Philosophy理事。2017年より日本学術会議連携会員。2018-2019年、京都哲学会代表、会誌『哲学研究』編集責任者。2018年より日本哲学会の欧文会誌*Tetsugaku*編集委員長。2019年より同学会理事。2013年より西田・田辺記念講演会委員。2014年より曉鳥敏賞選考委員会委員。2018年より西周賞選考委員。

「西田哲学の再解釈—行為的直観としての顔の表情」「思想」(2015年11月号)、「女性哲学」へと向かう九鬼周造著『「いき」の構造』『幕末明治 移行期の思想と文化』(勉誠出版、2016年 共編著)、*Philosopher la traduction / Philosophizing Translation* (Nanzan Institute for Religion and Culture/Chisokudō Publications, 2017年 編著)、"Trends and Prospects in Japanese Philosophy After 1945: The Contemporary Philosophy of Hiromatsu Wataru from Marxist Philosophy to the Theory of Facial Expression", *Contemporary Japanese Philosophy A Reader* (Rowman & Littlefield International, 2019年 共著)、「創造する翻訳—近代日本哲学の成長をたどって」「近代人文学はいかに形成されたか」(勉誠出版、2019年、共著)、「日本哲学の連続性」「世界哲学史8—現代グローバル時代の知」(ちくま新書、2020年共著)。

## 講義概要

この講義は、ある特定の専門分野をテーマに講義するのではなく、今日の日本経済の状況とその将来の方向について、私自身の考えを述べ、それについて皆さんと議論したい。

今日の経済は、グローバル化とイノベーションによって激しい市場競争を展開しており、日本経済もこの競争のなかで、アベノミクスに示される経済成長路線をとっている。しかし、日本は、人口減少社会にはいり、また、いわば成熟社会になりつつある。果たして市場競争が日本人の「幸福」につながるかどうか疑問であり、経済成長主義とは異なった新たな方向を打ち出すべきではなかろうか。本講義では、経済学、経済思想を検討しつつ、現代文明の在り方と日本社会の将来を論じてみたい。

## 佐伯 啓思

京都大学人と社会の未来研究院 特任教授  
京都大学 名誉教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

私は、政治や経済を中心して現代社会の在り方を、「現代文明論」として総合的に研究してきた。今日の世界は、グローバリズムという名のもと、アメリカを中心とした「近代主義」(合理的科学、自由と民主主義の政治、市場競争経済、技術革新、個人主義的な幸福追求など)に覆われつつあり、日本もこのアメリカ型近代主義に巻き込まれている。しかし、果たして、それは日本にとって「幸福」なのか、日本人の価値観の機軸はまた別にあるのではないか、という疑問もある。世界は本来は多様なものであり、それぞれの国の歴史的風土や文化のなかで政治や経済も機能するはずである。この講義(研究)は、その意味で、今日のグローバルな近代主義の反省にたって、より健全な世界へとわれわれの思考を鍛えようとするものである。

### Profile

1949年奈良県生まれ。東京大学経済学部卒業。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。広島修道大学商学部講師、滋賀大学経済学部助教授、同教授を経て、1993年～2015年京都大学大学院人間・環境学研究科教授。2015年定年退職、名誉教授。現在、京都大学こころの未来研究センター特任教授。第4期文部科学省中央教育審議会委員。1985年『隠された思考』筑摩書房でサントリー学芸賞を受賞、1994年『「アメリカニズム」の終焉』TBSブリタニカでNIRA政策研究・東畑記念賞を受賞、1997年『現代日本のリベラリズム』講談社で読売論壇賞を受賞。2007年第23回正論大賞を受賞。共生文明学・現代文明論・現代社会論、社会思想史を研究テーマとし、現代社会を文明論的観点から捉え、政治、経済の分野を中心に広く評論活動をおこなっている。

『隠された思考』筑摩書房(1985年)、『「欲望」と資本主義』講談社現代新書(1993年)、『自由とは何か』講談社現代新書(2004年)、『倫理としてのナショナリズム』NTT出版(2005年)、『学問の力』NTT出版(2006年)、『日本の愛国心』NTT出版(2008年)、『反・幸福論』新潮新書(2012年)、『20世紀とは何だったのか』PPF文庫(2015年)、『さらば、資本主義』新潮新書(2015年)など多数。

Category  
人文科学  
05  
前期

# 『枕草子』と『源氏物語』の誕生

YAMAMOTO Junko

作品は社会から生まれ、  
社会を変える



## 講義概要

『枕草子』と『源氏物語』の作品名はよく知られているが、それらが生まれた時代背景については、あまり知らない。講義では、藤原道長が政権を担ったいわゆる後期摂関制の初期、それぞれの作品がどのような必然性を以て創作されたのかを解説する。一条天皇の正妻・定子が一族内の政争の果てに没落・出家し、后妃としての正当性を失った時、『枕草子』は彼女の悲嘆を慰めるために書き始められた。また定子が崩御した時、天皇の悲嘆を慰めるために書き継がれた。定子の死は社会的事件であり、貴族社会全体を罪悪感や無常観、怨靈への恐怖といった混迷に陥れた。そうしたなかで、『源氏物語』は正面から天皇の責任を糾す作品として生まれた。二作品の時代・社会との相関を考える。

## 山本 淳子

京都先端科学大学人文学部 教授

## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

平安文学作品については、花鳥風月を愛でるばかりの悠長で退屈なものというのが、大方の印象であろう。だが、『枕草子』作者・清少納言の執筆の真意は、自らが仕える定子のため——生前はその心を慰め、死後は魂を慰めるためだった。同時にこの作品は、定子を喪った天皇や社会全体の疵を癒した。こうした、作品の果たした社会的意義を考えることは、文学の持つ力について再考を促すだろう。いっぽう『源氏物語』も、面白おかしい恋愛物語というより、定子亡きあとでの混迷した後宮を正常化する目的のために書かれた。その姿勢は中国の漢詩文が目指した所であり、『源氏物語』を支える思想のグローバリズムを見て取ることができる。この研究は従来の平安文学観を大きく変えるだろう。また巨視的には、古典文学作品全体の存在意義について、変革を迫ることになるだろう。

### Profile

平安文学研究者。石川県出身。京都大学文学部を卒業後、石川県立図書館で自治体史『加能史料』の編纂に関わる。その後、高校教員を務めたのち、京都大学大学院人間・環境学研究科に入学。地域文化研究を専攻し、文学と歴史、宗教の壁を超えた学際的研究を志す。2003年、京都学園大学助教授。2007年、今回の教科書『源氏物語の時代』でサントリー学芸賞(芸術・文学部門)を受賞。2008年、京都学園大学教授。2019年、校名変更により京都先端科学大学教授。著書は受賞作のほか、学術論文集『紫式部集論』『紫式部日記と王朝貴族社会』(いずれも和泉書院)、注釈書に『ビギナーズクラシックス 日本の古典 紫式部日記』『紫式部日記 現代語訳付き』(いずれも角川ソフィア文庫)、教養書に林真理子氏との共著『誰も教えてくれなかった「源氏物語」本当のおもしろさ』(小学館新書)、『平安人(びと)の心で「源氏物語」を読む』『枕草子のたくらみ』(いずれも朝日新聞出版)など。近著に『古典モノ語り』(笠間書院)。

Category  
社会科学  
01  
前期

# 人口減少社会のデザイン

HIROI Yoshihori

拡大・成長から持続可能性へ

## 講義概要

日本は2011年から本格的な人口減少社会となり、現在の出生率が続けば日本の総人口は2050年過ぎには1億人を切り、さらに減少していくことが予測されています。これは人口や経済の規模が拡大を続けるという、明治以降100数十年にわたって続いてきた時代状況からの根本的な変化であり、「拡大・成長」を基調とする社会のあり方からの大きな発想の転換が求められています。まちづくりや地域再生、企業行動や経営のあり方、社会保障や世代間の配分、東京・地方や都市・農村を含む国土のビジョン等々はどのようなものであり、そこでの「豊かさ」は「価値」などどのように展望されるでしょうか。人類の歴史の中での人口減少社会や資本主義のゆくえといった大きな視点も含め、人口減少社会のデザインを幅広い角度から考えてみましょう。

## 広井 良典

京都大学人と社会の未来研究院 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

日本は文字通り世界の「フロントランナー」として、人口減少あるいは超高齢化社会を経験していくことになります。したがって、このテーマは令和時代の日本にとっての中心に位置する話題であるとともに、日本がどのようなビジョンを描き対応をしていくかは世界にとっても意味があると言えます。こうした問題意識も踏まえ、私たちの研究グループは、「2050年、日本は持続可能か」という問いを立て、日本社会が2050年に向けて持続可能であるためにはどのような対応が必要かという点を、最近関心が高まっているAIを活用して分析し、必要な政策を提言するなどしてきました。同時に、人口減少社会においては人々の意識や価値観、死生観等も大きく変容していくことが予想されます。未来に向けての日本社会の持続可能性にとって、人口減少社会をめぐる研究は最優先のテーマと考えられます。

### Profile

1961年岡山市生まれ。1984年東京大学教養学部卒業（科学史・科学哲学専攻）、1986年同大学院修士課程修了後、厚生省勤務（1986～96年）を経て1996年より千葉大学法経学部助教授、2003年同教授。この間、2001～02年MIT 客員研究员。2016年4月より現職。専攻は公共政策及び科学哲学。「人間についての探求」と「社会に関する構想」を橋渡しすることが基本的な関心で、環境・福祉・経済が調和した「持続可能な福祉社会」を構想。社会保障・医療・福祉・都市・地域等に関する政策研究から、ケア・死生観等に関する哲学的考察まで幅広い活動を行っている。この間、教育再生懇談会委員、国際協力機構（JICA）社会保障分野課題別支援委員会委員、内閣府・幸福度に関する研究会委員、国土交通省・国土審議会専門委員、内閣府・選択する未来2.0懇談会委員、経済産業省・地域の持続可能な発展に向けた政策の在り方研究会委員等多くの公職を務める。

『日本の社会保障』岩波新書（1999年）でエコノミスト賞、『コミュニティを問い合わせなおす』ちくま新書（2009年）で大仏次郎論壇賞受賞。他の著書に『ケアを問い合わせなおす』ちくま新書（1997年）、『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』岩波新書（2001年）、『死生観を問い合わせなおす』ちくま新書（2001年）、『ポスト資本主義 科学・人間・社会の未来』岩波新書（2015年）、『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社（2019年）、『無と意識の人類史』同（2021年）など多数。

Category

社会科学

02

前期

# 女性ホームレスの語りを聞く

MARUYAMA Satomi

ジエンダーのレンズを通してみる世界

## 講義概要

ホームレスというと、男性がイメージされることが多いだろう。しかしわざか3%といわれているが、女性のホームレスもいる。彼女たちは、どのような人たちで、どんな人生を送り、どのようにして生きているのだろうか。

本講義では、フィールドワークを通して見えてきた、女性ホームレスたちの生活や語りを中心に、ホームレスや貧困の概念などの学問領域や、福祉制度のなかにあるジエンダー・バイアスについて、さらには私たちが暗黙のうちに想定している人間像について考えてみたい。

## 丸山 里美

京都大学大学院文学研究科 准教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

ごくわずかしかない、ホームレスの女性たち。彼女たちは、なぜホームレスをしているのだろう。あるきっかけから女性ホームレスを探して話を聞いていくなかで、一見理解することが難しいような彼女たちの行動にも、彼女たちなりの論理があることを知ることになった。そして社会のさまざまなところに、ジェンダーの思い込みがあることに気づいていくことになった。私たちが通常想定している人間像は、成人の健常者で、男性である。たとえ小さな声でも、それとは異なる彼女たちの声を聞くことからも、私たちがあたりまえのように思っている人間の見方について、考え直すことができるのではないだろうか。

### Profile

京都大学大学院文学研究科博士課程研究指導認定退学。京都大学文学博士。2010年立命館大学産業社会学部准教授。2019年より現職。専門は、社会学、ジエンダー研究、貧困研究。

『貧困問題の新地平——〈もやい〉の相談活動の軌跡』(編著、旬報社、2018年)、『質的・社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』(共著、有斐閣、2016年)、『女性ホームレスとして生きる——貧困と排除の社会学』(世界思想社、2013年、第33回山川菊賞受賞)、「世帯内資源配分に関する研究にみる「世帯のなかに隠れた貧困」」「大原社会問題研究所雑誌』739:8-21(2020年)、「ジエンダーから見た貧困測定——世帯のなかに隠れた貧困をとらえるために」『思想』2020年4月号,29-46(2020年)など。

Category  
社会科学  
03  
前期

# 発展・成長へのエコシステム

YANO Makoto

社会科学的素養の意義  
エコシステム構築と

## Profile

日本学士院会員(2021年より)、京都大学経済研究所特任教授、京都大学名誉教授(2018年より)、上智大学特任教授(2019年より)。東京大学経済学部卒(1977年)。ロチェスター大学経済学大学院卒業後(Ph.D. 1981年)、コーネル大学助教授、ラトガース大学助教授、横浜国立大学助教授・教授、南カリフォルニア大学客員准教授、慶應義塾大学教授、京都大学経済研究所教授、経済産業研究所所長・理事長などを歴任。

## 講義概要

バブル崩壊後、我が国の経済は長期停滞に陥り、30年以上が経過しました。最先端の科学技術を誇る我が国がそれを脱却できないのは、なぜでしょうか。本講義では、社会科学的素養が発展・成長ためのエコシステムの形成には不可欠という視点にたって、この問題を考えます。もともとエコシステムというのは、生命とその生存・進化をつかさどるシステムの総体のことです。それが適切にデザインされて、初めて、生命の維持・増殖が可能です。1990年代のアメリカのITビジネス界において、経済もビジネスも一つのエコシステムに支えられるという考え方があされました。この見方にそって、社会科学的素養とは何か、我が国の組織や経済の発展・成長を支えるエコシステムとはどんなものか、といった問題を考えます。

## 矢野 誠

京都大学経済研究所 特任教授  
京都大学 名誉教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

本講義の根底には、「経済の健全な発展・成長を支えるためには、高質な市場が不可欠」という経済理論(市場の質理論)があります。わたくしは、この理論を提唱し、高質な市場を支えるエコシステムのあり方を研究してきました。エコシステムは一つの目的に沿ったシステムの総体です。したがって、システムのパーツの間に固定的な垣根が存在しては、適切なエコシステムは形成できません。停滞からの脱却には、自分が属する組織や経済・社会のどこに垣根があるのかを正確に知り、社会のニーズに応えられるエコシステムを再構築する必要があります。ニーズの解明、エコシステムのデザインに欠かせないのが、本講義でご紹介する社会科学的素養です。

Category  
自然科学  
01  
前期

# 微生物に無限の可能性を求めて

OGAWA Jun

いかに貢献できるかを考える  
微生物が未来社会に

## 講義概要

微生物は地球上に広く存在し、多様な物質循環を担っています。これからの地球社会が目指す持続的社會は、微生物のこの物質変換能力に支えられた健全な相互作用が保たれている社会と考えます。本講義では、「微生物は環境調和型の未来産業を牽引する」、「微生物は我々の健康を支える」、「微生物は生物間相互作用を介して物質循環を駆動する」の3軸から微生物の力の活用事例を紹介するとともに、未来社会創造に貢献しうる微生物の無限の可能性を議論したいと思います。

世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

人類は、微生物の存在を認識する以前から、その多様な力の恩恵に与ってきました。食における発酵醸造の技術がその良い例でしょう。近代科学により、微生物の物質変換能力が様々に解明される現代、微生物が作り出す分子の多様性によって、食品の健康機能、土壤の肥沃さ、水の美しさがもたらされることが理解されてきています。微生物の能力を理解し、その機能が最大限に発揮される環境を築くことが、ヒト、社会、そして地球の健康を実現し、持続的循環型社会を創造することにつながると考えます。

## 小川 順

京都大学大学院農学研究科 教授



### Profile

1967年滋賀県生まれ徳島県育ち。1990年京都大学農学部農芸化学科卒業。1995年同農学研究科農芸化学専攻博士後期課程修了(博士(農学))。1995年京都大学農学部・助手。2006~2007年フランス国立農業研究所客員研究員。2008年京都大学微生物科学寄附研究部門・特定教授。2009年より京都大学大学院農学研究科・教授(応用生命科学専攻・発酵生理及び醸造学分野)。

研究テーマと抱負として、微生物に多様な機能を探索し、それを社会のために役立てる研究をしたい。趣味は、クラシック音楽(オーボエ演奏・指揮)、酒遊食楽。

2004年農芸化学奨励賞。2006年日本農学進歩賞。2018年食品免疫学会賞。2020年Ching Hou Biotechnology Award (American Oil Chemists' Society)。2021年Chevreul Medal Award 2021 (French Society for the Study of Lipids)など。

Category  
自然科学  
02  
前期

# 人工知能とそのインパクト

KANADE Takeo

人工知能とは何か、その技術の考え方とインパクトを議論する

## 講義概要

「人工知能」という言葉を聞かない日はないと言っていいほどこのこの頃である。しかし、一般には、その技術的内容については深層学習・シンギュラリティと言う言葉からの想像を超えない理解、その社会的インパクトについては懐疑論から極端な恐怖論までセンセーショナルな議論が多く見受けられるようである。このあたりについて、講義とディスカッションと、かつ講師の研究生活から得た発想法を通じて、科学工学的により正確な理解と本質的な議論を目指したい。

## 金出 武雄

カーネギーメロン大学 ワイタカー記念全学教授  
京都大学高等研究院 招聘特別教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

人工知能は、「ひとが一般に知能的と呼ぶ能力」を人工的に、現在では主にコンピュータによって実現しようとする科学工学の分野である。いくつかの領域ではすでに、人と同様、時には人以上の能力を持つものが現れている。その社会的インパクトは大きい。新しい機能や産業が人の生活を豊かにし、人の能力自体もその助けを借りて進み、これまで難しかった多くの問題の解決につながると思われる。一方、現在の多くの職業はAIによって置き換わる可能性は明らかであるし、人工知能が創造も含め人を超えたときには「人とは何か」という根源的な問い(一意的な回答はないだろうが)を発していると考えられる。

### Profile

人工知能、ロボット、計算機視覚の研究者。1973年京都大学で博士号・助教授の後、1980年カーネギーメロン大学に移籍し、同大学ロボット研究所Directorなど歴任。400以上の論文と120,000回以上の参照数により、h-indexと呼ばれる論文インパクト指標において計算機科学分野TOP10(2020)に入る。主な研究成果は、世界最初の顔画像認識、MPEGなど動画像処理における最も基本的なアルゴリズムであるLucas-Kanade法、1995年に最初にアメリカ大陸を横断した自動運転車Navlab5、第35回スーパー・ポウルで採用された33台のロボットカメラによる360度の視野回転のプレー再生システムEye Visionなど。京都賞、フランクリン財団バウアー賞、米国計算機学会/人工知能学会アレン・ニューウェル賞、米国電気電子学会Founders Medal、日本人工知能学会功績賞など。文化功労者、日本学士院会員、米国工学アカデミー外国特別会員。

Category

自然科学

03

前期

# 日本の地下で何が起きているのか

KAMATA Hiroki

活動期を賢く生き抜く  
地球科学で地震噴火の

## 講義概要

近ごろ頻発する地震と噴火は、2011年の東日本大震災が引き金となって地盤が不安定になったからである。日本列島は1000年ぶりの「大地変動の時代」に突入し、内陸の直下型地震と火山噴火が数10年ほど続き、西暦2030年代には南海トラフ巨大地震が予想され、全人口の半数6000万人が被災する。東日本大震災の10倍以上の被害をもたらす、いわば「西日本大震災」に今から準備しなければならない。さらに、富士山を初めとして20座の活火山が活動期に入ったことも懸念され、首都直下地震とともに我が国の喫緊の課題である。昨今、地球温暖化で気象災害が激化しているが、地球科学的には脱炭素の政策は大噴火のもたらす地球寒冷化でひっくり返る可能性もある。

講義では最先端の研究成果に基づく地下の状況を、市民の目線で分かりやすく解説する。どうやって命を守るのか、いま何を準備すべきか、どのような社会を構築すべきか、等々。

私は24年間の教授としての研究・教育活動を経て、2021年4月から京都大学レジリエンス実践ユニット特任教授に着任した。地球科学の基礎研究者から「科学の伝道師」にシフトした目的と経緯と方法論も、熱く語りたい。

### Profile

1955年生まれ。筑波大学付属駒場高校卒業。東京大学理学部地学科卒業。通産省(現・経済産業省)主任研究官・米国内務省カスケード火山観測所上級研究員を経て、1997年～2021年に京都大学大学院人間・環境学研究科教授。理学博士(東京大学)。専門は地球科学・火山学・科学コミュニケーション。内閣府災害教訓継承分科会委員、気象庁活火山改訂委員、日本火山学会理事、日本火山学会誌「火山」編集長、日本地質学会火山部会長などを歴任。日本地質学会論文賞受賞(1996年)、日本地質学会優秀講演賞受賞(2004年)。テレビ・雑誌・新聞・著書で科学を明快に解説する「科学の伝道師」。京大の講義は毎年数百人を集めの人気で教養科目1位の評価を得てきた。「世界一受けたい授業」「情熱大陸」「ようこそ先輩 課外授業」「グレートネイチャー」などに出演。

『成功術 時間の戦略』文春新書(2005年)、『火山噴火』岩波新書(2007年)、『世界がわかる理系の名著』文春新書(2009年)、『京大人気講義 生き抜くための地震学』ちくま新書(2013年)、『火山はすごい』PHP文庫(2015年)、『地球の歴史、上中下』中公新書(2016年)、『地学ノススメ』ブルーバックス(2017年)、『日本の地下で何が起きているのか』岩波科学ライブラリー(2017年)、『地球とは何か』サイエンス・アイ新書(2018年)、『理科系の読書術』中公新書(2018年)、『座右の古典』ちくま文庫(2018年)、『読まずにすませる読書術』SB新書(2019年)、『富士山噴火と南海トラフ』ブルーバックス(2019年)、「新版 一生モノの勉強法」ちくま文庫(2020年)、『理学博士の本棚』角川新書(2020年)、『理系的アタマの使い方』PHP文庫(2021年)、「100年無敵の勉強法」ちくまQブックス(2021年)、「武器としての教養」MdN新書(2022年)など。共著に『一生モノの英語勉強法』祥伝社新書(2015年)、『山極寿一×鎌田浩毅 ゴリラと学ぶ』ミネルヴァ書房(2018年)、『野田秀樹×鎌田浩毅 劇空間を生きる』ミネルヴァ書房(2018年)、『知っておきたい地球科学』岩波新書(2022年)、『揺れる大地を賢く生きる』角川新書(2022年)など。

## 鎌田 浩毅

京都大学レジリエンス実践ユニット 特任教授  
京都大学 名誉教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

地震と噴火を伝えるアウトリーチ(啓発・教育活動)では、必ず生じる「心の葛藤」がある。同僚学者の目が気になって「後ろ指をさされない」ように説明するからだが、こうした「守りの姿勢」で語った結果、市民には腑に落ちない解説となる。反対に、私が市民の目線で解説と提言を行うと、同業者から「ちょっと正確さに欠けるね」と冷ややかな反応が返ってくる。ここで私は「市民サイドに沿う不安はない」と言ったら嘘になる。しかし、「科学の伝道師」はこの不安に打ち勝って成り立つ仕事なのだ。伝えたいことは至ってシンプルで、自然の一部である人間は自然を到底コントロールできない。一方、知恵を絞れば災害を減らすことは可能で、ここに地球科学の出番がある。

そもそも私が研究できるのは、社会へいざれ還元させていただくからではないか。地球科学の「知識」を人の命が助かる「行動」まで繋げるには新しい方法論が必要なのだが、いま私が格闘する最大のテーマでもある。「京大人気No.1教授」24年+名誉教授2年をフルスロットルした白熱 課外講義。

Category  
自然科学  
04  
前期

# 自己と非自己の免疫学

SAKAGUCHI Shimon

新しい免疫医療に向けて

## 坂口 志文



京都大学名誉教授 大阪大学名誉教授  
京都大学ウイルス再生医科学研究所 客員教授  
大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任教授

### 講義概要

免疫系は、私たちの身体を病原微生物から守りますが、身体を作っている正常な細胞、分子とは反応しません。では、免疫系は、自己と非自己をどのように区別しているのでしょうか。この“免疫的自己・非自己”を区別する仕組みが分かれば、自己免疫病やアレルギーの理解が進み、治療・予防が可能になります。また、自己から発生した“自己もどき”である癌細胞に対して強い免疫反応を起こすことが可能となり、移植臓器をあたかも自己臓器として受容させることができるとなるでしょう。私たちと共に生じている腸内細菌も“自己もどき”であり、健常人では免疫反応が起りません。免疫反応が起ければ炎症性腸炎の原因となります。このような免疫的自己・非自己という概念をもとに新しい免疫医療の現状と展望について講義します。

### 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

日本も含めて先進国では、最近のがん免疫療法の実用化の様に、免疫の潜在能を媒介とした様々な疾患治療法の研究、臨床応用が進んでいます。一方、先進国では感染症をコントロールできる様になり感染症の頻度が下がるに従って、近年自己免疫病、アレルギー、炎症性腸炎などの免疫疾患が増えてきています。衛生的な環境では強い免疫反応を起こす必要がなくなり、免疫系が「鍛えられない」結果、このような免疫疾患が増えてくるかもしれません。このようなパラドックスを考察しながら、先進国、発展途上国を問わず、医学・医療の未来はどうあるべきか、議論したいと思います。

### Profile

1976 年京都大学医学部卒業。京大病理、愛知癌センター研究所、京大免疫研究施設を経て1983 年医学博士取得。1983 年よりJohns Hopkins 大学、Stanford 大学博士研究員(Lucile P. Markey Scholar)、1989 年Scripps 研究所、カリフォルニア大学サンディエゴ校Assistant Professor、1992年科学技術振興事業団「さきがけ」研究専任研究員、1995 年東京都老人総合研究所免疫病理部門・部門長、1999 年より京都大学再生医科学研究所教授、2007年より同研究所長、2011年4月より大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授、2016 年より大阪大学名誉教授、京都大学名誉教授。2004 年William B. Coley Award、2008 年慶應医学賞、2009 年紫綬褒章、2012年学士院賞、同年米国科学アカデミー外国人会員、2015 年Canada Gairdner International Award、同年Thomson Reuters 引用栄誉賞、2017年Crafoord Prize、2017年文化功労者、2019 年英国Birmingham 大学名誉医学博士、2019 年文化勲章、2020年Paul Ehrlich and Ludwig Darmstaedter Prize、その他受賞多数。2016 ~2018 年日本免疫学会理事長。

Category

自然科学

05

前期

子どものがん

TAKITA Junko

子どものがんを克服するための挑戦

## 講義概要

小児期に発症するがんの本邦における発生率は、年間約2,500人であり、成人がんと比較すると極めて稀である。しかし、小児がんは、本邦において小児期の主要な死亡原因となっている。従って、小児がんの克服は、少子高齢化が進行する本邦において、早急に取り組むべき重要課題と言える。小児がんの中でもとりわけ遠隔転移や再発を来す例は依然として予後不良であり、有効な治療法は確立されていない。これらの難治例に対して現時点では、救命が最優先事項であり、強力な治療がなされているが、救命したとしても重篤な晚期合併症が深刻な問題となっている。希少疾患ゆえに認知度が低い小児がんの現状、課題、克服のために進められている研究について概説する。

## 滝田 順子

京都大学大学院医学研究科発達小児科 教授

世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

現在、国内の小児がんサバイバーは5万人に達すると推計されており、今後増加することが見込まれている。小児がんサバイバーが増加するにつれ、QOLを著しく損なう晚期合併症が深刻な社会問題となっている。これらのがんサバイバーは、複数科の定期的な受診がほぼ一生涯必要であり、一人当たりの医療費は健常な国民と比較すると膨大な額にのぼる。小児がんに対して分子病態に立脚した合理的な治療法の開発がなされれば、重篤な晚期合併症の回避をもたらし、医療費削減が期待できる。単に小児がんの治療成績の向上のみならず、がんサバイバーのQOL向上をもたらし、健全な若年者の育成、ひいては生産人口の増生につながり、社会福祉の向上に与えるインパクトは大きい。

## Profile

1991年日本医科大学医学部卒業。同年、東京大学医学部小児科入局。1992年焼津市立総合病院小児科医員。1993年国立がん研究センター研究所生物学部リサーチアソシエイトに就任後、小児がんの基礎研究に着手。1996年東京都立駒込病院小児科医員。2000年東京大学医学部附属病院小児科医員、2003年同助手、2005年同無菌治療部講師。臨床の傍ら、基礎研究を継続し、小児固形腫瘍の代表である神経芽腫におけるALKの異常を発見する(Takita et al., Nature, 2008)。2013年東京大学大学院医学系研究科小児科准教授、2018年京都大学大学院医学研究科発達小児科教授に就任し、現在に至る。東京大学医師会賞、日本小児科学会研究学術賞、日本癌学会 JCA-Mauvernay Award、JCA女性科学者賞など受賞。

Category  
自然科学  
06  
前期

# 宇宙を支配する数式

HASHIMOTO Koji

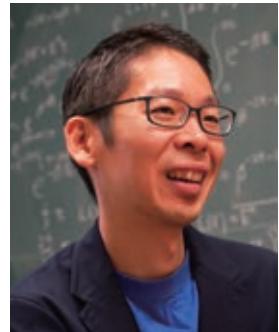
宇宙のすべてを解き明かす素粒子物理学、  
その現状と課題、超ひも理論へ。

## 講義概要

この宇宙、そして物質と力、は究極のところ、何からできているのでしょうか。我々人類は、素粒子物理学を用いて、この宇宙がたった一つの数式で支配されていることを突き止めました。この数式は、素粒子の標準模型(にアインシュタインの一般相対性理論を加えたもの)と呼ばれ、人類の英知の結晶です。本講座では、この数式をまず書いてみることから始め、数式のそれぞれの項の意味、そしてその意義を解説します。また、暗黒物質やニュートリノ振動現象など、数式では説明しきれない宇宙の謎についても述べます。これらを解決するのは、「素粒子が小さなひもである」という仮説「超ひも理論」なのでしょうか。まだ、宇宙を支配する数式は、完成していないのです。

## 橋本 幸士

京都大学大学院理学研究科 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

素粒子物理学が明らかにした、極微の世界を記述する量子力学、そして極大の宇宙を記述する相対性理論、これらは100年前に作られ、現在の電子機器や衛星宇宙技術などの基盤として人間の生活を支えています。役に立つまで1世紀かかる研究は、自分の人生という尺度では測れない普遍的な価値を生むものです。素粒子物理学は、世界の成り立ちを知る学問であり、現在人類が到達した最高地点の科学です。これを知った人は、世界を見る方法じたいが変わるでしょう。

### Profile

理論物理学者。1973年生まれ、大阪育ち。2000年京都大学大学院理学研究科修了、理学博士。2000年サンタバーバラ理論物理学研究所研究員、2001年東京大学助手、2010年理化学研究所准主任研究員(橋本数理物理学研究室主宰)、2012年大阪大学教授などを経て、2021年より現職。専門は理論物理学、素粒子論、超ひも理論。世界各国で100以上の招待講演、現在は湯川秀樹が拓いた研究室の後任教授として教鞭を取る。日本物理学会理事。執筆教科書に『Dプレーン:超弦理論の高次元物体が描く世界像』(東京大学出版会)、共著に『ディープラーニングと物理学』(講談社)など。一般向け著書に『物理学者のすごい思考法』(集英社)、『超ひも理論をパパに習ってみた』『「宇宙のすべてを支配する数式」をパパに習ってみた』(講談社)など。季刊『kotoba』にエッセイを連載中。サイエンスとアートをつなぐ活動を行い、出演したパフォーミングアート作品“Every day is a new beginning”でArt Innovation 2019国際会議にて京都大学総長賞を受賞。

Category  
自然科学  
07  
前期

# 〈からまりしろ〉としての建築

HIRATA Akihisa

生命のような建築を  
つくることは可能か

## 講義概要

かつて昆虫少年だった私は、昆虫たちが生きている自然環境と、自分たちが生活している建物の空間がどうしてこんなに違うのだろう、と思っていました。建築はもと自然環境のような質を獲得できるはずであり、人間たちは自らの動物的本能を呼び覚まされるような都市・建築環境の中で、もっと生き生きと活動できるはずなのです。建築を自然と対立する人工物としてではなく、生態系の一部として根本的にとらえなおすこと。〈からまりしろ〉(=からまる余地[しろ])はそんな建築のための造語です。一本の樹木に鳥たちがからまるように、人間が自らの場所を見出せる、〈からまりしろ〉としての建築がつくれないか。そんな問い合わせられた様々な建築の実践を紹介したいと思います。

## 平田 晃久

京都大学大学院工学研究科 教授



(c)Luca Gabino

## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

〈からまりしろ〉の概念は、均質でコントロール可能な「空間」を標榜してきた前世紀的な建築を越え、より立体的で自然環境のような質を持った建築や都市環境が生まれるための理論的支柱です。

それは、第一義的には従来と異なる三次元的で自然的要素とからまり合う新しい建築形態とつながります。また、市民ワークショップを通じてつくった公共建築などの実践において、様々な人々の思いとからまり合う建築も生まれつつあります。

人間の精神は自らをとりまく環境と互いに映し合い影響し合います。生態系とからみ合う新しい社会は、建築や都市環境の新たな発展と共にあり、〈からまりしろ〉の建築はそのような発展に寄与するものと信じます。

### Profile

1971年大阪府に生まれる。1997年京都大学大学院工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務の後、2005年平田晃久建築設計事務所を設立。現在、京都大学教授。  
主な作品に「柳屋本店」(2006)、「Bloomberg Pavilion」(2011)、「太田市美術館・図書館」「Tree-ness House」(2017)、「八代市民伝統芸能伝承館」(2021)等。第19回JIA新人賞(2008)、第13回ベネチアビエンナーレ国際建築展金獅子賞(2012日本館での共働受賞)、村野藤吾賞(2018)、日本建築学会賞(2022)等多数受賞。著書に『Discovering New』(TOTO出版)、『JA108 Akihisa HIRATA 平田晃久2017→2003』(新建築社)等。また、バウハウス(ドイツ)、ハーバード大学(アメリカ合衆国)、Architecture Foundation(イギリス)等で講演。そのほか、東京、ロンドン、ベルギーなどで個展、MoMAにて"A Japanese Constellation"展(2016)を合同で開催。

Category  
自然科学  
08  
前期

# 小胞体ストレス応答

MORI Kazutoshi

私達の細胞が持つている驚異の復元力

## 講義概要

生き物の基本単位は細胞で、その中に存在する最重要物質は、DNA(遺伝物質)とタンパク質(生命活動の担い手)です。生命活動の基本はDNAに書き込まれた暗号を解読してタンパク質を正しく作りつづけることと言っても過言ではありません。また、体内には多数の臓器が存在する様に、細胞の中には小さな臓器(細胞内小器官)が多数存在し、役割分担しています。小胞体は細胞内小器官の一つで、タンパク質の製造工場という役割を果たします。この工場はかなり優秀ですが、それでも時にうまく機能しなくなり、不良品タンパク質がいつも以上にできてしまうことがあります。この状態を小胞体ストレスと呼んでいます。この悪くなった状況を元に戻そうとする細胞の復元力(小胞体ストレス応答)の仕組みと意義をお話します。

## 森 和俊

京都大学大学院理学研究科 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

小胞体ストレス応答は、生命活動の担い手であるタンパク質の立体構造を保証することによって、様々な生命現象や生物進化を裏から支えていることが明らかになってきました。小胞体ストレス応答が働くないと私達は生まれてくることさえできません。小胞体ストレスもしくは小胞体ストレス応答が様々な病気の発症や進展に関与すると考えられています。糖尿病、アテローム性動脈硬化、パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症などの神経変性疾患、心不全や心筋症、肥満や代謝性疾患、炎症性腸炎、がんやウィルス感染等です。私達基礎研究者が解明した仕組みを使った創薬が始まっています。この応答は老化にも関与しており、健康寿命を延ばすことができるようになるかもしれません。

## Profile

1958年岡山県倉敷市生まれ。1981年京都大学薬学部卒業。1983年京都大学大学院薬学研究科修士課程修了。1985年京都大学大学院薬学研究科博士課程退学。1987年京都大学薬学博士。1985年岐阜薬科大学助手、1989年米国テキサス大学博士研究員。1993年エイチ・エス・ピー研究所副主任研究員・主任研究員。1999年京都大学大学院生命科学研究科助教授。2003年より京都大学大学院理学研究科教授。小胞体ストレス応答研究の開拓者として、2005年米国ワiley賞、2006年日本生化学会柿内三郎記念賞、2008年大阪科学賞、2009年カナダガードナー国際賞、2010年紫綬褒章、2012年上原賞、2014年朝日賞、アルバート・ラスカー基礎医学研究賞、香港ショウ賞、2015年トムソン・ロイター引用荣誉賞、2016年恩賜賞・日本学士院賞、2017年ブレークスルー賞、2018年文化功労者、2019年安藤百福賞大賞。

Category  
自然科学  
09  
前期

# 人類の進化と文化のミスマッチ

YAMAGIWA Juichi

人類の進化史と文明史を遡り、どこで間違ったかを探り当て、未来社会を展望する

Category

自然科学

09

前期

## 講義概要

現代は人新世と言われ、地球環境が大きく破壊される危機の中でこれまでとは全く違った暮らし(ニューノーマル)を組み立てねばならないと考えられている。そのためには、人類の歴史を有史以前に遡り、生物としての進化史を類人猿と比べ、人類がどのような心身の変化を経験して現代に至ったかを概観する必要がある。その上で、農耕・牧畜開始以来の文明史の中で人類が道を踏み外したと思われる点を探し出し、情報通信機器が急速に発達し、超スマート社会を迎えるなかで人間の心身と人工的な環境との間でどんなミスマッチがあるかを考察する。さらに、10年後、30年後の未来にふさわしい幸福な社会とは何かを考えてみることにする。

## 山極 壽一

総合地球環境学研究所 所長  
京都大学 名誉教授  
前京都大学 総長



## 世の中をどのように変えるのか、どんなインパクトがあるのか

今、人間の歴史を見直す作業に注目が集まっている。それは人間と社会がどのようにできたのか、これからどのようにになって行くかについて信頼できる見取り図が描けないからである。さらに地球の平均気温の上昇によって自然災害が頻発し、カーボンニュートラルやSDGsなど地球規模で待ったなしの対策が迫られている。そこで、人間の歴史を有史以前に引き伸ばして考えることによって、人間と社会の本質を明らかにし、人間にとって真の幸福とは何かを問うこととする。それは、未来社会を具体的に構想するうえで大きな一助になるだろう。

### Profile

総合地球環境学研究所所長、京都大学名誉教授。1952年東京生まれ。京都大学理学部卒業、同大学院理学研究科博士後期課程退学。理学博士。カリソケ研究センター客員研究員、(財)日本モンキーセンター・リサーチフェロー、京都大学靈長類研究所助手、京都大学大学院理学研究科教授などを経て2020年まで京都大学総長。国立大学協会会長、日本学術會議会長、総合科学技術・イノベーション会議議員、国際靈長類学会会長を歴任。現在、京都市動物園名誉園長、日本学術振興会評議員、環境省中央環境審議会委員、大阪・関西万博シニアアドバイザーなどを務める。1978年よりアフリカ各地でゴリラの野外研究に従事。類人猿の行動や生態をもとに初期人類の生活を復元し、人類に特有な社会特徴の由来を探っている。

Category

複合領域

01

前期

# 脳の暗号を解読する

KAMITANI Yukiyasu

他者から見える世界を知ることができることができるか

## 講義概要

われわれは外界からの入力がなくても想起したり夢を見たりすることができます。見ている世界も、外界の単なるコピーではなく、主観に彩られています。脳は、外界を独特な仕方で内在化した世界のモデル(ニューロバース)を構築しており、脳信号はニューロバースをコード化している「暗号」とみなすことができます。私の研究室では、脳信号パターンから心の状態に関するさまざまな情報を解読(デコード)する方法を開発してきました。本講義では、ニューロバースの外在化・共有化という観点から脳情報解読研究を俯瞰し、脳科学が生み出す未来を展望したいと思います。

## Profile

奈良県生まれ。東京大学教養学部卒業。カリフォルニア工科大学でPh.D.取得後、ハーバード大学、プリンストン大学、ATR脳情報研究所を経て、2015年から現職。機械学習を用いて脳信号を解読する「ブレイン・デコーディング」法を開発し、ヒトの脳活動パターンから視覚イメージや夢を解読することに初めて成功した。SCIENTIFIC AMERICAN誌「科学技術に貢献した50人」(2005)、塚原仲晃賞(2013年)、日本学術振興会賞(2014年)、大阪科学賞(2015)等を受賞。2018年、ATRフェローの称号を授与される。サーケンタイン・ギャラリー(ロンドン)でのピエール・ユイグの展示“UUmwelt”(2018年)のための映像を提供するなど、アーティストとのコラボレーションも進めている。

## 神谷 之康

京都大学大学院情報学研究科 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

インターネットやスマートフォンなど新たな情報通信技術が、多様なコミュニケーションを可能にしてきました。しかし、超えられていない壁があります。それは「身体」です。われわれが情報を発信するとき身体(筋肉)を動かす必要がありますが、筋肉とつながっている脳部位はごく一部です。その限られたチャンネルを通して、脳は世界とつながっているのです。しかし、脳情報解読技術は、そのボトルネックを超える脳と世界のブロードバンド通信を実現します。これによって、他人が経験している世界を可視化し、共有することができるようになるかもしれません。また、自分自身も意識していない・覚えていない情報を解読することにより、自己の深層を知る手がかりが得られるかもしれません。このような技術は、人間の文明や文化にどのような影響を与えるでしょうか。

Category

複合領域

02

前期

# 現代史概論

FUJIHARA Tatsushi

20世紀を多角的にとらえる

## 講義概要

参加者には事前に、『○○の20世紀』という新書を書くとしたら、どんなタイトル&副題にし、どんな内容にするか、考えてもらい、それを発表いただいた上で、20世紀の輪郭を掴んでいきます。

『歴史の屑拾い』でも紹介したように、私は現代史講義を学生へのこんな質問から始めています。自分が歴史をかくと言う意識を明確にすることで、多角的に、かつ生活の延長として歴史をとらえる方法を考えてみたいと思います。

## 藤原 辰史

京都大学人文科学研究所 准教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

この研究は、高校までの社会で学んだ歴史を、もっと深く、広く、自分の関心の延長として捉えるものです。そのような教養を身につけることで、中東や東欧、南米など「遠い」地域で起こる問題を自分の問題として考え、地球規模の思考をすることが可能になり、それが、世界を単なる「マーケット」や「資源のありか」としてしか捉えられない貧しい世界観を変えることにつながります。

## Profile

1976年生まれ、2002年、京都大学人間・環境学研究科中退、同年、京都大学人文科学研究所助手、東京大学農学生命科学研究科講師を経て、2021年4月現在、京都大学人文科学研究所准教授。主な著作に『ナチスのキッチン』(共和国、河合隼雄学芸賞)、『分解の哲学』(青土社、サントリー学芸賞)、『縁食論』(ミシマ社)、『農の原理の史的研究』(創元社)など。2017年には日本学術振興会賞も受賞。

Category  
複合領域  
03  
前期

# 創発・発達 ヒトの脳と心(人間らしさ)の

MYOWA Masako

次世代人類が生きる環境、  
社会について考える

## 講義概要

ヒトを含む生物は、身体を持っています。身体には物理的制約があります。身体が環境に能動的にふるまう過程で、膨大な量の情報はその制約に基づきふるいにかけられます。情報は、身体をもつその個体にとって「意味あるもの」が選択、構造化されることで、ヒト特有の形質(脳や心)は創発・発達していきます。さらに、個の発達は周囲の社会、文化の形成に影響を与え、それが次世代の形質を創発・発達させる制約そのものとなります。つまり、生物としてのヒトの脳と心が創発・発達する原理、機序を十分理解しないまま、環境や社会を変革することは、ホモ・サピエンスの未来を左右することでもあります。「ヒトとは何か」という基本的理解を軸に、次世代人類が育つ環境、社会について考えてみましょう。

## 明和 政子

京都大学大学院教育学研究科 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

日本では、サイバー空間とフィジカルの空間を高度に融合させたSociety 5.0が目指されています。新型コロナウィルス感染症の拡大が、この流れを一気に加速させました。Society 5.0では、利便性の向上、省力化(無駄のなさ)に価値がおかれていました。しかし、これは完成した脳をもつ大人の脳と心の働きを前提にしているにすぎません。哺乳類動物の一種であるヒトは、他個体との「密・接触」を基本とする環境に適応して進化してきた生物です。大人にとっては一見無駄にも見える環境、社会で様々な経験を積み重ねながら、ヒトの脳と心(人間らしさ)はゆっくり育まれていいくのです。今、私たちが生きる社会、環境は未曾有のスケールで変化しています。今後、どのような未来を次世代人類に託していくべきなのか。皆さんとともに議論したいと思います。

## Profile

京都大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学)。京都大学靈長類研究所研究員、京都大学大学院教育学研究科准教授などを経て、現在同教授。日本学術会議連携会員、文部科学省科学技術・学術審議会委員、こども家庭庁有識者懇談会委員。ヒトとヒト以外の靈長類を胎児期から比較し、ヒト特有の脳と心の発達とその進化的基盤を明らかにする「比較認知発達科学」を世界にさきがけて開拓した。近著に『マスク社会が危ない—子どもの発達に「毎日マスク」はどう影響するか? (宝島新書)』『ヒトの発達の謎を解く—胎児期から人類の未来まで (ちくま新書)』『まねが育むヒトの心 (岩波ジュニア新書)』など。NHKスペシャル『ママたちが非常事態! 最新科学で迫るニッポンの子育て1・2(2016年放送)』『ニッポンの家族が非常事態! わが子がキレる本当のワケ(2017年放送)』『ジェンダーサイエンス 男X女 性差の真実(2021年放送)』等の監修・出演により、現代社会に生きるヒトが抱える問題を最新科学から理解する活動にも力を注いでいる。

Category

芸術

01

前期

# 書へのいざない

KUISEKO Hakujū

東洋芸術の第一  
であつた書の過去・現在・未来

## 講義概要

### 1、理論

- A 書道史
- B 書論
- C 過去・現在・そして未来を考える

### 2、実技 座右の銘を書く

## 杭迫 柏樹

日展 名誉会員



### Profile

1934年生。京都学芸大学美術科(書専攻)卒。日展理事、日本書芸院名誉顧問、現代書道二十人展メンバー。2005年日展内閣総理大臣賞、2008年日本藝術院賞、2012年京都市文化功労者顕彰、2021年京都府文化特別功労賞、2021年旭日小授章。

『王羲之書法字典』二玄社（1987年）、『中国書ガイド』二玄社（1988年～）、『NHK趣味悠々・暮らしの中の書』NHK出版（2001年）、『想いを送る年賀状一筆と墨のメッセージ』二玄社（2005年）ほか多数。

主なパブリックコレクションに、メトロポリタン美術館(USA)ボール・コレクション(スイス)、上海博物館(中国)、王羲之墓(中国)、各國日本文化会館・文化交流館、各國日本大使館・総領事館、日本藝術院、日展会館、成田山書道美術館、首相官邸、全国著名社寺ほか多数。

Category

芸術

02

前期

# 茶の心 —和・敬・清・寂—

SEN Genshitsu

茶道精神が普遍的な平和思想である

## Profile

第二次世界大戦の折、日本海軍特別攻撃隊の一員として死を覚悟しながらも終戦に至った。復員後に宗家で見た最初の光景は、父親である第十四代淡々斎宗匠が英語で米軍将校にお茶を教えている姿であった。将校が英語で厳しく指導され、真摯に日本の茶道を学ぶその光景に、ある種の敬意、憧憬の念を抱いた。日本は歴史的・文化的価値のある茶道文化を有しており、その家の継承者としての自覚を持って、国際社会に平和・和の心を布教することを決心。アメリカ留学等の経験を経て、60数カ国、350回以上の渡航を行い、形としての日本文化を世界中に定着させた最初の人である。単に茶道人としてだけでなく、日本社会・国際社会の中で文化人としての役割を追求しており、それらの功績に対して日本や世界から文化勲章をはじめとする多くの褒章を受けている。また茶道の学術的研究も行い、哲学博士・文学博士を取得している。

## 千 玄室

裏千家 前家元



## 講義概要

日本を代表する総合文化「茶道」の精神は「和」に代表されるが、この「和」の思想は、まさしく平和思想そのものであり、しかも特定の宗教や思想といった偏ったものではなく、価値や様式の多様化する国際社会の中で普遍性を有するものである。この茶道の精神と形が国際社会に果たす役割は大きいものがある。



Category  
芸術  
03  
前期

# 西洋美術の革新者たち

HIRAKAWA Kayo

「行為」をうながす絵画／絵画という「体験」

## 講義概要

本講義では、美術史学の思考法や研究法を学び、美術史研究の最新の動向に触れることで、巨匠たちの創造行為の本質に迫ります。題材として取り上げるのは、15、16世紀、すなわち、西洋美術史の革新の時代です。「ルネサンス」と一般に呼ばれるこの時代には、イタリアやネーデルラント(現在のベルギー、オランダなどに該当)をはじめとするヨーロッパの各地で、まさに「巨匠」の名に相応しい才能あふれる芸術家たちが活躍しました。ファン・エイク、レオナルド・ダ・ヴィンチ、デューラー、ラファエロ、ミケランジェロ…。本講義では当時の絵画作品の展示方法や形態に着目します。そして、鑑賞者に「行為」をうながすことによって、非日常的な「体験」を提供する場としての絵画芸術のあり方に迫ります。

## 平川 佳世

京都大学大学院文学研究科 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

ウイズ・コロナ、SDGs、デジタル・トランスフォーメーション…。未来へと続く持続可能な社会の構築のため、今日の私たちは、新たな時代を切り開く柔軟な発想とそれを実現する能力が求められています。本講義では、「絵は見るもの」という常識を覆します。美術館制度が成立する以前のヨーロッパでは、絵画は多様な形態をとて日常生活に溶け込み、私たちに様々な行為をうながす「もの」でした。開いたり、裏返したり、足を踏み入れたり…。「行為」を通じて一種の「経験」を与えるのが、前近代の絵画のあり方です。こうした歴史を紐解くことで、新しい「経験」を人々に与える「もの」を私たちはいかにして創造しうるのか、模索します。

### Profile

1991年京都大学文学部史学科(考古学専攻)卒業。ピクター音楽産業株式会社勤務を経て、1993年京都大学文学部哲学科(美学美術史学専修)に編入学、1995年同大学院修士課程に進学、2000年同大学院博士後期課程を研究指導認定退学。その間、1998年10月より1999年3月までウィーン大学に留学。博士(文学)(京都大学)。2001年、近畿大学文芸学部講師に着任、助教授、准教授として2008年度まで教鞭をとる。その間、2007年9月より2008年3月まで、ローマ、マックス・プランク美術史研究所に研究滞在。2009年より京都大学文学研究科准教授、2014年3月より半年間、客員研究員としてトリアー大学に滞在、2017年より現職。専門は北方ルネサンス絵画史。

The Pictorialization of Dürer's Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries, Peter Lang, 2009、中村俊春編『絵画にみる私の世界の表象』(「変容する親密圏/公共圏」第3巻)京都大学学術出版会、2012年(共著)、「スランゲル作『最後の審判』——銅板油彩画の宗教的機能に関する試論」(『京都美術史学』第1号、2020年、所収)等。

Category  
人文科学  
01  
後期

# 次世代社会の条件 異文化理解こそが

Oussouby SACKO

グローバル化のなかの多様性と文化の役割を考える

## Profile

1966年マリ共和国に生まれる。高校卒業と同時に国の奨学金を得て中国に留学。北京語言学院（現・北京語言大学）、南京市の東南大学等に6年間滞在して建築学を実践的に学ぶ。1990年東京で短期のホームステイを経験し、アフリカに共通するような下町の文化に驚く。

1991年3月に来日し、同年9月から京都大学大学院で建築計画を学ぶ。博士号取得後も日本学術振興会特別研究員として京都大学に残り、2001年に京都精華大学人文学部教員に着任。2013年には学部長。2018年4月同大学学長就任（～2022年3月）。現在の専門は空間人類学。

『知のリテラシー・文化』ナカニシヤ出版（2007年 編著）、『現代アフリカ文化の今』青幻舎（2020年 編著）、『「これからの世界」を生きる君に伝えたいこと』大和書房（2020年）、『アフリカ出身 サコ学長、日本を語る』朝日新聞出版（2020年）、『アフリカ人学長、京都修行中』文藝春秋（2021年）、『ウスビ・サコの「まだ、空気読めません」』世界思想社（2021）。

## ウスビ・サコ

京都精華大学 前学長  
人間環境デザインプログラム／  
デザイン研究科（建築専攻）教授



### 講義概要

グローバル化が急速に進むなかで、かつての文化的規範や国民国家という枠組みは揺らぎ始めています。これまでの共同体は解体され、個が中心となる社会が形成されます。いわゆる「ジャパンスタンダード」や「ジャパンシステム」が崩れ、物事の価値判断は一国のルールや政策では決めにくくなります。グローバル化によって変化した社会基盤は個を大切にし、個々人は因襲的な束縛から解放されます。そこでは、人種、性別、宗教、性的指向、社会経済的背景、および民族性などを考えて、個と個が互いの違いを認め合うことが重要になります。異文化を受け入れることが苦手な日本人にとっては、あらたな、そして大きな不安となることでしょう。本講義では、グローバル化する社会の中で人間はどう生きるべきか、多様性と文化の役割について考えます。

### 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合うことがグローバル化される社会で生きる条件となります。世界中のひとびとが集まるなかでは、多様性を大切にする必要があります。本講義と研修を通して、多様な文化と価値観を受容するとともに自己の文化を見つめ直し、そして新しい文化と社会を創造する力を身につけてもらいます。いつの時代にも世界にはさまざまな問題があふれていますが、わたしたちには明るい未来を作り上げるために、世界の多様性を知ることと異文化を理解する必要があります。特に、「個々が自分の立ち位置」をしっかりと決め、「ブレない軸」を持つことが次世代の社会の中で生きる条件となります。本講義で獲得できる「知識」は、個々の受講生がこれから生きていくうえで大きな力となることを確信しています。

## Category

人文科学

02

後期

人新世(Anthropocene)を生むる

SUZUKI Shok

科学技術のELSIと人間の使命

講義概要

鈴木 晶子

京都大学 名誉教授  
理化学研究所 客員主管研究員



技術文明を享受するだけでなく、その創造の担い手として人類がこれまで歩んできた文明化の過程を科学哲学・教育哲学の観点から掘り下げ、AI技術をはじめとする新たな技術文明の課題に焦点を当てる。技術文明への適応過程で、自らの能力や技能を更新し続ける人間の可能性と限界とは何か。また、18世紀以来の近代啓蒙の時代に構築された近代社会システムにおいてこれまで自明とされてきた基本的事柄は今後どのように変容していくか。本講義では、人新世(Anthropocene)を生きる人間にとって、環境、エネルギー、ゲノム、AIなど将来の世代を展望した長期的責任体系のもとでの技術文明の課題について、その基本的論点を取り上げ、受講生と議論できればと考えている。

世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

大きな変革期には、動物や機械との比較を通して、人間とは何か、また何を目指して生きるべきか、生きることの意味を問う哲学に再び光が当たり始めている。技術文明の急速な進展にともなう不確実性を制御するために、科学技術をめぐる倫理的・法的・社会的課題(Ethical-Legal-Social-Issues: ELSI)の検討が喫緊の課題となっている。こうした法や倫理の標準化を目指す国際的議論とその社会実装における文化や宗教、習俗の多様性の尊重、イノベーションとレギュレーションの二項対立を乗り越える道を問うこと、その問いの質を上げていくことは、産官学いずれの領域においても「専門家としての私」と「世の一隅を照らす私人としての私」を統合していく要となるだろう。

Profile

専門は科学哲学、教育哲学、歴史人類学。伝統的なわざの修練にみる触覚知性や直観の働きの哲学的・歴史人類学的解明を通して、新たな学習論の構築に取り組んできた。2016年より理化学研究所革新知能統合研究センターで人工知能の倫理的、法的、社会的影響について研究プロジェクトを主宰。AI時代の技術文明のあり方や倫理について、OECDやユネスコでの議論に参加。総務省情報通信政策研究所特別研究員、総務省AIネットワーク社会推進会議幹事。ベルリン自由大学客員教授(2009-2010)。日本学術会議会員(2005-2014)、同連携会員(2014-2020)。

DWIH Coffee Talk #6 「AIと倫理」 - YouTube

DAAD/DWIH記事 <https://www.dwh-tokyo.org/ia/2021/07/14/connecting-east-and-west-3/>

ユネスコAIパラドックス Shaping the Future of AI through Cultural Diversity - YouTube

Category

人文科学

03

後期

# 稳健イスラームの可能性

TONAGA Yasushi

## Profile

1960年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。博士(地域研究)。イスラーム思想(とくにスーフィズム)が専門。中東地域を核としつつ、イスラーム世界を広く研究対象とする。文献研究とフィールドワークを共に用い、高度な形而上学から市井の民間信仰までを一つながらのものとして捉えられないか、模索している。著書に『イスラームのとらえ方』(山川出版社)、『イスラーム神秘思想の輝き—愛と知の探求』(山川出版社、今松泰との共著)、編著書に『岩波イスラーム辞典』(岩波書店)、『イスラーム世界研究マニュアル』(名古屋大学出版会)、『イスラームの神秘主義と聖者信仰』(東京大学出版会)、『中東・イスラームへの30の扉』(ミネルヴァ書房)、監修書にティエリー・ザルコンヌ(遠藤ゆかり訳)『スーフィーイスラームの神秘主義者たち』(「知の再発見」双書152)創元社など。

## スーフィズムの挑戦

## 講義概要

イスラームはとかく、頑迷・不寛容・過激・攻撃的といった印象を持たれがちである。このような一般的なイスラーム像は、戒律・イスラーム法を重視するアラブ諸国やイスラーム原理主義的な主張と密接に結びついている。本講義では、これと異なる、寛容で非暴力なもう一つのイスラーム像を提示してみたい。そのようなイスラーム理解は、非アラブ圏に広くみられる。イスラームといえば中東・アラブの宗教と考える人が多いと思うが、現在中東に住むイスラーム教徒は、世界総信徒人口の2割程度に過ぎない。また、このもう一つのイスラーム像が、しばしばスーフィズムに基づいていることも重要である。「イスラーム神秘主義」としばしば訳されるスーフィズムが、現代社会でいかに稳健イスラーム確立に貢献しているかを語ってみたい。

## 東長 靖

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

私が学問をする時にいつも考えているのは、常識を打破するということである。そのために有用な手段として、時空間を異にするものを知ることが挙げられる。時間に関して言えば歴史を遡ってみると、空間に関して言えば異文化を体験してみることがこれに当たるだろう。本講義では、イスラームという私たちにふだんなじみのない社会文化システムについて知って頂く。自分たちと違う常識をもつ人々や文化に触れた時に、ひとは自分の常識が世界の常識でないことに気づく。また、西洋近代中心の知のあり方に対しても疑問をもつようになる。そういった新たな視点を手に入れたうえで、地球規模で現在私たちが直面している諸問題を考え直す契機に、本講義がなれば幸いである。

Category  
人文科学  
04  
後期

# 「しなやかさ」の系譜 稽古と無心

NISHIHARA Tadashi

ハピニングに対応する身心の土台

## 講義概要

無心。本当はよくわからないのだが、なぜか皆、深い知恵を予感する。ではそこに何が潜んでいるのか。例えば、無心から生じる「おのずからの動き」。意図的に作り出すのではない。恩寵のようにやってくる。あるいは、型という知恵。型の稽古は「ハピニングに対応する身体」を育てる。そうした身心を可能にする土台を育てる。もしくは「身心一如」「離見の見」「修証一等」といった謎めいた言葉、そこに込められた先人たちの「しなやかな」教え。自然体、暗黙知、脱学習、アート、フロー、成就。「身をもって学ぶ(わざを身に付ける)」プロセスと、そこに秘められた豊かな知恵について学ぶ機会とする。

## 西平 直

上智大学グリーケア研究所 特任教授  
京都大学 名誉教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

稽古の思想は「しなやか」である。稽古は「わざ」が「わざとらしく」なることを嫌う。稽古は「上手くなろうとする」ことであると同時に「上手くなろうとしなくなる」ことである。「型」や「無心」の思想は逆説に満ちている。一筋縄では進まない。よじれ・もつれ・反転する。その秘められた「しなやかさ」を学ぶ。「しなやかさ」が即興を生み、創発の土台となる。新しい状況にそのつど対応してゆく身心の基礎・基本・土台。予測不能な時代であればこそ、伝統の知恵に立ち返り、そこから跳ね返される仕方で、自分なりに考え直す機会としたい。

### Profile

1957年、甲府市生まれ。信州大学、東京都立大学、東京大学にてドイツ哲学と教育哲学を学び、1990年から立教大学文学部専任講師・助教授、1997年から東京大学教育学研究科助教授・准教授を経て、2007年から京都大学教育学研究科教授。専門は、教育人間学、死生学、哲学。思想研究による「人の一生(ライフサイクル)」研究を志し、宗教心理学・東洋哲学における「宗教性(スピリチュアリティ)」研究を継続中。近年は毎年ブータンに通う。

無心や稽古に関して、『世阿弥の稽古哲学』東京大学出版会(2009年)、『無心のダイナミズム』岩波現代全書(2014年)、『無心の対話・精神分析フィロソフィア』創元社(2017年 共著)など。その他、『エリクソンの人間学』東京大学出版会(1993年)、『魂のライフサイクルーユング・ウィルバー・シュタイナー』東京大学出版会(1997年)、『教育人間学のために』東京大学出版会(2005年)、『生涯発達とライフサイクル』東京大学出版会(2014年 共著)、『誕生のインファンティア—生まれてきた不思議・死んでゆく不思議・生まれてこなかった不思議』みすず書房(2015年)、『ライフサイクルの哲学』東京大学出版会(2019年)、『井筒俊彦と二重の見』、『西田幾多郎と双面性』(共に、ぶねうま舎、2021年)など。

## 講義概要

東南アジア諸国は、介護者などの送り出し元と思われがちだが、タイやシンガポール等一部の国々では既に高齢化が急速に進んでいる。東南アジアは、国家の制度や公的サービスが脆弱な部分を、家族やコミュニティを中心とした社会資本や相互扶助的なサポートが補っていると言われてきた。今でも老親のケアの担い手は基本的に子であるべきという規範は強い。しかし、少子高齢化とともに実際には家族では担いきれなくなってしまい、様々な綻びがみられるなかで、新しい工夫が始まっている。

社会規範としても実態としてもケアの実践が変わりつあるなかで、老いはどの様に体験されているのだろうか。そこには、高齢先進国日本が学ぶべきことがあるだろうか。

## 速水 洋子

京都大学東南アジア地域研究研究所 教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

日本は世界でも最も高齢人口比率の高い高齢先進国であり、タイで制度政策に関わる人々は日本の介護保険制度に学ぶべきであると一様に述べる。しかし学ぶべきは彼らの側だけだろうか。先行した経験に基づく知恵を、後に続く国々と共有することはできるとしても、先を急ぐ中で見過ごしてきた道がないだろうか。また彼らが後から高齢化を体験するからといって我々と同じ道筋をたどるとは限らない。道は無数にあるだろう。だとすれば日本が、私たちが、社会の在り方や人の生き方についてタイから学ぶこともたくさんあるのではないか?私が専攻する文化人類学や地域研究では、他文化について研究し、学ぶことは自分自身の日常や生き方、そして自分を取り巻く社会を顧みることを抜きにしてはありえない。特に今、閉塞する日本社会がこれからどのように歩んでいくか、どの様に老いを生きるのか、自他の間で学べることは限りなく多い。

### Profile

国際基督教大学教養学部卒業。ブラウン大学大学院(米)人類学博士課程修了(1992年PhD)。1997年より京都大学東南アジア研究センター(当時)に文部教官助手として着任しその後、東南アジア研究所准教授、教授、そして組織統合等を経て現在に至る。研究関心は、タイの少数民族における宗教と社会、ジェンダー、家族に始まり、その後ミャンマーでも調査を実施。ここ十年ほどタイや東南アジア社会におけるケアと老いに関心がある。

著書に『差異とつながりの民族誌 北タイ山地カレン社会の民族とジェンダー』世界思想社(2009); Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen. Kyoto University Press and Trans Pacific Press (2004年).編著に『東南アジアにおけるケアの潜在力一生のつながりの実践』京大出版会(2019年);『人間圏の再構築:熱帯社会の潜在力』京都大学学術出版会(2012年共編); The Family in Flux in Southeast Asia: Institution, Ideology and Practice, SilkWorm Press and Kyoto University Press(2012年共編); Gender and Modernity in Asia and the Pacific. Kyoto University Press & Trans-Pacific Press(2003年共編)など。

Category

人文科学  
06  
後期

# 禅と日本文化

MATSUYAMA Daiko

禅の教えとリーダーシップの醸成

## 講義概要

禅の本質は「不立文字」。つまり、物事の本質は言葉では表現できない、伝えることができない、ということだ。実践体験を通して、核心を伝えていく。禅は単なる瞑想の手段ではない。「行住坐臥」寝ているときも、歩いているときも、すべての瞬間が禅である。ひとつの生き方と言ってもよい。今回の講義では、文字では表現できないと言われる禅の本質をあえて言葉を使って表現しながら、その奥深さを味わうための入り口したい。坐禅の実践とともに、禅が生み出した庭や茶など日本文化の精神性にも触れ、禅がいかに日本文化に影響を与えてきたかということも感じていただきたい。また、歴史上さまざまなリーダーが禅に影響を受けており、禅の教えとリーダーシップの関係にも注目する。

## 松山 大耕

妙心寺退蔵院 副住職



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

いまや禅は日本だけではなく世界中で広く親しまれている。しかし、日本の禅と今、世界で流行しているマインドフルネスやZENとは違いもある。一番大きな違いは、日本の禅は功利主義的な思考をしない、ということだ。マインドフルネスをすれば、パフォーマンスが上がるのではないか、ZENを実践すれば健康的な生活が過ごせるのではないか。確かにそういう「ご利益」はあるかもしれないが、あくまでそれは「おまけ」であって本質ではない。そういった功利主義的な捉え方であれば、今、世界にさまざまな歪みを産んでいる資本主義的な考え方を強化するに過ぎない。それを抜けたところにすばらしい世界が広がっており、そういう存在があるということに気づいてほしい。

### Profile

1978年京都市生まれ。2003年東京大学大学院 農学生命科学研究科修了。埼玉県新座市・平林寺にて3年半の修行生活を送った後、2007年より退蔵院副住職。日本文化の発信・交流が高く評価され、2009年観光庁Visit Japan大使に任命される。2016年『日経ビジネス』誌の「次代を創る100人」に選出され、同年より「日米リーダーシッププログラム」フェローに就任。2018年より米・スタンフォード大客員講師。2019年文化庁長官表彰(文化庁)、重光賞(ボストン日本協会)受賞。2021年より(株)ブイキューブ社外監査役、京都市教育委員会委員。2022年より京都観光大使。

2011年には、日本の禅宗を代表してヴァチカンで前ローマ教皇に謁見、2014年には日本の若手宗教家を代表してダイライ・ラマ14世と会談し、世界のさまざまな宗教家・リーダーと交流。また、世界経済フォーラム年次総会(ダボス会議)に出席するなど、世界各国で宗教の垣根を超えて活動中。

『大事なことから忘れない〜迷える心に効く三十の禅の教え〜』世界文化社(2014年)、『京都、禅の庭めぐり』PHP(2016年)、『ビジネスZEN入門』講談社新書(2016年)

Category  
社会科学  
01  
後期

# 「想定の範囲内の差異」の向こう側へ

ISHII Mihoko

文化人類学を通して「あたりまえメガネ」を外してみる

## 講義概要

近年、あちこちの大学や企業で、多様性の尊重や異文化理解の重要性が喧伝されている。他者理解やコミュニケーション・スキルの向上を目指すための講習なども盛んだ。だが多くの場合、そうした場で想定されている「多様性」や「異文化」は、言語や生活習慣の違いといった「想定の範囲内の差異」であるようにみえる。それらは目的合理性や自律性、効率性といった近代社会の前提を搖るがるものではない。他方で、文化人類学が目を向けてきたのはそうした近代合理性の外側にあるものたちだ。たとえば呪術や儀礼、贈与にアナキズム。近代社会の基準でみれば、それらは意味のわからないもの、取るに足りないもの、ネガティブなものにもみえるだろう。だが、そうした物事のもつローカルな論理を追究することで、見えてくるものがある。それは、「この私」という強固な主体の座を「降りる」という可能性だったり、既存の国家や制度の妥当性を疑う姿勢だったりするかもしれない。この講義では、主に呪術や憑依にまつわる具体的な事例を取り上げながら、既存の制度や「この私」を維持・拡張していくような思考とは異なる、オルタナティヴな実践や考え方への手がかりを受講生の皆さんとともに考えていきたい。

### Profile

これまで、アフリカのタンザニアとガーナ、南インドで人類学的フィールドワークを行ってきました。タンザニアでは、「ラスタファリ運動」と呼ばれる黒人運動と、この運動にかかわる都市出稼ぎ民の生活について。ガーナでは、多民族的な開拓移民社会における精靈祭祀と妖術、呪術について。そして南インドでは、「ブータ祭祀」と呼ばれる憑依とともに神靈祭祀について、調査を行ってきました。主な研究テーマは憑依・呪術・儀礼をはじめとする人々の宗教実践ですが、これと関連して、①村落社会における土地制度と母系制、②宗教実践と交易・商業との関係、③儀礼における身体性とバースペクティヴィティ、④神靈祭祀と環境運動、大規模開発の関係、⑤人間と非人間の社会的なインタラクション 等のテーマについても調査研究を進めています。

## 石井 美保

京都大学人文科学研究所 准教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

目的合理性、自律性、効率性——私たちが知らない間に身につけ、内面化している近代社会の枠組みや規範をカッコに入れてみて、世界の見え方はおのずと少し変わってくる。それは、「想定の範囲内の差異」の向こう側に出てみることで、自分と世界の「あたりまえ」をずらしてみることでもある。フィールドワークで培われた身体感覚に根ざしつつ、自己のありようを揺さぶる他者との出会いを通して、私たちの日常を規定するさまざまな前提を相対化してきた文化人類学の思考法を学ぶことで、近代社会の「あたりまえ」に収まらない新たな発想や関係性へのヒントを見つけることができる。

Category  
社会科学  
02  
後期

# 個人のアイデンティティ 家族関係の多様化と

NISHITANI Yuko

国家法と宗教規範の協働  
多文化主義の視点からみた

## 講義概要

欧米では、多数のムスリム移民が中近東から流入する中で、本国でなされた一夫多妻婚や夫による妻の追い出し(タラーク)離婚などの効力を認めてよいか否か議論されている。日本でも、ミャンマー人のムスリム夫婦が国内でタラーク離婚を行い、その有効性が問われた事件がある。このように一国内で、多数派と異なる社会規範や宗教規範に従う者が増えてくると、いかにして受入国的基本的価値や社会秩序を維持しつつ、移民のアイデンティティを尊重して多文化共生を図るかが重要な課題となる。本講義においては、欧米での移民をめぐる家族関係の規律、及び国家法と宗教規範の協働について学ぶことで、今後日本においてどのように渉外的な家族関係を規律し、多文化主義を実現しうるかについて考察する。

## 西谷 祐子

京都大学大学院法学研究科 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

本講義に触れることで、イスラーム教やユダヤ教などの宗教規範に根差した家族関係の規律のあり方について多角的に学ぶことができるほか、今後の日本の移民政策を考えるきっかけにもなると思われる。日本は、少子高齢化が進む中で人手不足を解消するため、多数の外国人労働者を受け入れてきたが、彼らの多くはコロナ禍の下で深刻な困窮状態に陥った。これは、日本が外国人に安定した滞在許可や社会保障等を確保せず、正面から移民政策の是非を議論しないまま、窮余の策として多数の外国人を受け入れてきた結果である。本講義を通じて、広く欧米での多文化主義をめぐる議論に触れることで、今後の日本が進るべき方向性を考えるきっかけとなるであろう。

## Profile

京都大学大学院法学研究科・教授。東北大学准教授、九州大学教授を経て、2015年から現職。国際私法・比較法・家族法を専門とする。京都大学法学部卒業、同大学院法学研究科修士課程修了後、ハイデルベルク大学法学博士(1998年)。ドイツ、フランス、イタリア、オランダ、米国にて長期在外研究。デューク大学及びニューヨーク大学(米国)、チューリッヒ大学及びローザンヌ大学(スイス)、テルアビブ大学(イスラエル)、台湾法官学院等の客員教授を歴任(一部予定)。2020年フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞受賞。

[https://cislp.law.kyoto-u.ac.jp/intl\\_research.html](https://cislp.law.kyoto-u.ac.jp/intl_research.html)も参照。

Category  
社会科学  
03  
後期

# 中国経済発展の本質と行方

LIU Deqiang

近代的制度と価値観なくして  
近代国家なし

## 講義概要

中国の改革開放政策が実施されてから今年で44年。この間、中国は権威主義市場体制の下で急速な経済成長を実現し、世界第二の経済大国になり、一部の分野では世界の先端を走るようになった。しかし、ここにきて、この体制の限界が露呈し、国内外で様々な軋轢を生みだすことになった。中国経済はさらに成長し、日米欧並みの先進国になれるのか。本講義では、これまで中国経済が発展してきたメカニズムを検討し、中国経済や社会が直面している諸問題の原因を明らかにした上で、今後の中国経済成長の可能性を展望する。米中対立とそれが中国の経済成長への影響や、日中経済関係と日本企業の対中進出についても触れておく。

## 劉 德強

京都大学大学院経済学研究科 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

今日の中国は政治的、経済的、そして社会的な問題が多く抱えているが、この中に、中国特有のものもあれば、経済発展の特定の段階においてどの国にも生じうる問題もある。後者の問題については、経済のさらなる発展や社会の進歩を通じて解決すると期待できるが、前者の問題はその国の政治や歴史、文化に依存する可能性があり、経済発展によって解消できないだけではなく、経済発展そのものを阻害する可能性さえある。この講義では、中国の直面する問題の本質を明らかにすることで、中国の行方を展望することができる。

### Profile

1980年北京大学経済学部入学。1982年に来日し、東京都立大学経済学部に入学。1991年一橋大学大学院経済学研究科博士課程理論経済学専攻修了。経済学博士。1991年東京都立大学経済学部助手。1992年東京学芸大学教育学部講師に就任、その後助(准)教授、教授を経て、2008年に京都大学経済学研究科教授。2009-2011年及び2021年から京都大学大学院経済学研究科東アジア経済研究センター長。2010年から数回中国経済学会(現中国経済経営学会)理事、2020年より会長。開発経済学の視点から、中国経済の発展メカニズムや経済発展に関連する諸問題を研究。いわけ中国経済の成長パターンの転換、国有企业改革、産業構造、労働問題、所得格差などの問題に取り組んでいる。

Category

自然科学

01

後期

# 仁科芳雄とその弟子たち

ITO Kenji

その指導者の歴史学的研究  
知識生産の場と

Category

自然科学

01

後期

## 講義概要

新しい知識の生成は社会や経済の発展の原動力の一つである。だが、そもそも知識とはどのように生み出されるのだろうか。新しい知識は定義からして知られていないものである以上、それを生み出す確実な方法はない。しかし、歴史を繙くことで、過去の様々な事例を研究することはできる。近年の科学史研究の成果の一つは、知識を生み出すのは個人の営みではなく、集団的な社会的な営みだということである。戦前の日本においてもっとも活発な知識生産を行った集団の一つは、財團法人理化学研究所において物理学者・仁科芳雄が率いたグループである。この講義ではこの仁科芳雄と彼の研究グループに焦点をあて、どのような集団・場所において創造的な知識生産が可能になるのか、それを率いる指導者の方はどうのようなものかを考える。

## 伊藤 憲二

京都大学大学院文学研究科 准教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

本研究は、戦前から終戦直後まで、日本の科学、とくに物理学の研究の発展に大きな役割を果たした仁科芳雄に関する歴史研究である。現在、日本は国際的な物理学研究において主要な国の一つと言ってよいが、日本の物理学者がこのような地歩を占め始めたようになったのは1930年代のことである。その過程において重要な役割を果たしたのが仁科芳雄であったことはしばしば言われてきた。しかし、実際に仁科芳雄が何を行い、それがどのように日本の物理学の発展に寄与したのかは明らかではなかった。この研究はそれを明らかにすることを通して、知識生産の社会的な仕組みの一面を明らかにするものである。

### Profile

東京大学教養学科卒、同大学理学系研究科修了、ハーバード大学科学史学科博士課程修了。東京大学先端科学技術研究センター、同大学院情報学環、総合研究大学院大学を経て現職。20世紀日本の物理学、とくに量子物理学を中心に科学技術史、知識のグローバルヒストリーを研究している。日本における量子力学の導入を主要な研究とし、学位論文および指定した教科書のほか、次の出版物がある: Kenji Ito, "Early Japanese reactions to the interpretation of quantum mechanics, 1927-1943," Olival Freire, Jr. ed., *Oxford Handbook of the History of Quantum Interpretations* (Oxford University Press, 2022), 687-707。この数年の間、科学と外交をめぐる歴史研究を手掛け、2021年に国際誌に二つの特集号を共編したほか、次のような出版物がある: Kenji Ito, "Transnational scientific advising: Occupied Japan, the United States National Academy of Sciences and the establishment of the Science Council of Japan," *British Journal for the History of Science* (2023), forthcoming; Kenji Ito, "Three tons of uranium from the International Atomic Energy Agency: diplomacy over nuclear fuel for the Japan Research Reactor-3 at the Board of Governors' meetings, 1958-1959," *History and Technology* 37(1) (2021), 67-89; Kenji Ito, "The scientific object and material diplomacy: The shipment of radioisotopes from the United States to Japan in 1950," *Centaurus* 63(2) (2021), 296-319。さらに最近は、日本における学術雑誌の歴史についての研究を行っている。

Category

自然科学

02

後期

# においは薬になりますか

ITO Michiho

多勢の意見が必ずしも真理なのではない

# においは薬になりますか

# においは薬になりますか

## 講義概要

においは見えない、拡散するなど科学的取り扱いに難点がある上に、五感のひとつである嗅覚が記憶と強く結びついているということなど、サイエンスになりにくい要素を多く含んでいる。このため、においの薬理活性を動物実験等のいわゆる薬学的に汎用される方法で示すためにはいろいろと工夫が必要だった。他方、日本の法律では生薬の品質評価基準のひとつにおいを使う。漢方薬・生薬の世界では、においは医薬品の品質のものさしのひとつになるのである。

扱い方によって大きく捉え方が変わるにおいに期待できること、またにおいのある医薬品としての漢方薬・生薬類を日本はどう扱ってきたのかなど、においを端緒に、身近でありながらあまり知られていない天然物医薬品の裏の世界を紹介する。

## Profile

1969年大阪生まれ。1988年神戸女学院高等学部卒業、京都大学薬学部入学、1992年同大学薬学部卒業、1994年同研究科修士課程薬学専攻修了、博士後期課程に進学、1996年同課程を中途退学、京都大学薬学部助手に採用される。1999年博士(薬学)の学位取得。2002~3年米国ワシントン州立大学生物化学研究所に博士研究員として留学、2003年京都大学大学院薬学研究科助教授(2007年に准教授に名称変更)、2022年より国立医薬品食品衛生研究所 生薬部 部長。専門分野は生薬学・薬用植物学。特に、精油成分合成研究、においの生薬薬理学的検討、薬用植物の栽培研究、生薬・天然物のレギュラトリーサイエンス、フィールドワークを軸とした伝統医薬の調査研究など。大学での教育研究の傍ら、厚生労働省薬事食品衛生審議会委員や医薬品医療機器総合機構日本薬局方原案審議委員会生薬等委員会委員、日本学術会議連携会員、また各種学会の理事、評議員、代議員等の活動も。研究のため、また国際学会やWHO、ISO等の国際会議出席のための出張が多く、途上国から先進国まで海外経験は豊富。2006年日本生薬学会学術奨励賞、2012年第37回漢方研究イスクラ奨励賞、2016年国際薬学連合Fellow award、2017年第29回日本東洋医学会奨励賞受賞、2021年令和3年度日本生薬学会学術貢献賞受賞。

## 伊藤 美千穂

国立医薬品食品衛生研究所生薬部 部長



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

超高齢化社会に急速に変容していく日本では、介護を必要とする人口とそれに伴う医療費の急増、高止まりなどが予想され、健康自己管理、健康寿命の延伸の必要性などが強く言われるようになっている。セルフメディケーションとして品質保証がしっかりなされた一般用医薬品を上手に利用しつつ、より手に取りやすい天然物医薬品や健康食品などがさらに活用されることが期待される。においを利用する商品は雑貨の区分で扱われるが多く、手軽さに大きく利点がある反面、医薬品と異なり、品質保証・品質管理の面では注意を要する。ポイントを抑えつつ、医薬品のみならず、雑貨や食品などに分類されるものも上手に利用することで、より豊かで健康な日常が手に入るのではないだろうか。

Category  
自然科学  
03  
後期

# 機械学習

KASHIMA Hisashi

自ら学習する人工知能の仕組みと応用

## 講義概要

三回目といわれる今回の人工知能ブームにおいて、機械学習、より広い意味ではデータ解析技術は中核的な役割を担っているといえます。元々は人工知能研究の一分野として始まり、知識獲得のボトルネックを解消するための解決策として期待された機械学習は、ビッグデータやIoTといった近年の社会的要請を背景に大きく飛躍しました。現在では多くのプレイヤーが機械学習を競争力の源泉として位置づけようとしている一方で、メディア等では一部のセンセーショナルな側面のみが強調され、人工知能や機械学習に対する過剰な期待や過信があることも否めません。本講義で機械学習の基本的な考え方や方法論について初步から解説するとともに、深層学習や集合知の利用などの近年の動向についても紹介していきます。

## 鹿島 久嗣

京都大学大学院情報学研究科 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

前述したように、機械学習は現在の人工知能の中核となる技術であり、様々な分野で大きなインパクトをもたらしつつあります。特に、機械学習をはじめとするデータ駆動の考え方は、新たなサービスやシステムを開発するにあたり、発想の幅を大きく広げることに役立ちます。また、昨今のブームによって、何でもできるかのように喧伝されがちな人工知能技術の可能性と限界を大まかに理解しておくことは、「人工知能」という流行語に振り回されず、適正に利用をするうえで必須といえるでしょう。

### Profile

1997年京都大学工学部数理工学科卒業。1999年京都大学大学院工学研究科応用システム科学専攻修士課程修了。2007年京都大学大学院情報学研究科知能情報学専攻博士課程修了。博士(情報学)。1999年から2009年までIBM 東京基礎研究所勤務。2009年より東京大学大学院情報理工学系研究科数理情報学専攻准教授。2014年より京都大学大学院情報学研究科知能情報学専攻教授。2016年より2020年まで理化学研究所 革新知能統合研究センター ヒューマンコンピュテーションチーム チームリーダー(兼任)。人工知能、特に機械学習、データマイニング等のデータ解析技術の研究開発とその実社会応用に従事。近年では、人間と機械による協働問題解決(ヒューマンコンピュテーション)にも注力。2009年情報処理学会 長尾真記念特別賞、2012年マイクロソフトリサーチ日本情報学研究賞、2013年船井情報科学振興財団 船井学術賞ほか多数受賞。

Category  
自然科学  
04  
後期

# 気体の科学と技術

KITAGAWA Susumu

新しい多孔性材料による「霞(水蒸気、空気)を  
食つて生きる」未来を展望する

## 講義概要

ナノサイズの空間を持つ物質は我々の周りに溢れています。貯蔵、分離、触媒など生活に密着する用途に用いられる多孔性材料として良く知られています。代表物質である活性炭は古代エジプトにおいて医療用に用いられたことがパピルスに記述されており、現在においても水の浄化など幅広く用いられています。人類がその活性炭を発見したのが3000年を経て、18世紀に当時の新しい多孔性材料として天然鉱石から無機物であるゼオライトが発見され、20世紀前半の人工合成の成功を経て、石油産業をはじめとして人類の産業に大きな進歩をもたらしました。このように既存の多孔性材料は、人類の生活に不可欠のものとして長年にわたって利用されてきました。もし、活性炭やゼオライトが担ってきたナノ細孔による機能を凌駕するような、貯蔵、分離などの機能を有する、あるいはまったく新しい多孔性機能を有する材料が発見されれば、人類の生活に革新的な変化をもたらす事が期待される。この革新的材料を生み出す空間の化学を紹介し、身の回りの気体がかかわる現代の課題（地球環境、エネルギー、医療、健康）への挑戦について述べてみたい。

### Profile

1974年京都大学工学部卒業、1976年京都大学大学院工学研究科修士課程修了、1979年京都大学大学院工学研究科博士課程修了。1988～1992年近畿大学理工学部助教授、1992～1998年東京都立大学理学部教授、1998～2017年京都大学大学院工学研究科教授、2007～2012年京都大学物質一細胞統合システム拠点副拠点長・教授、2013～2016年京都大学物質一細胞統合システム拠点拠点長・教授、2016～2018年 京都大学高等研究院副院長、2016年より京都大学 高等研究院物質一細胞統合システム拠点拠点長、2017年より京都大学高等研究院特別教授。2009年日本化学会賞、2010年トムソン・ロイター引用栄誉賞、2011年紫綬褒章、2013年京都大学孜孜賞、2013年英国王立化学会フェロー会員、2013年江崎玲於奈賞、2016年日本学士院賞、2016年米国化学会パソロ賞、2017年藤原賞、2017年ソルベイ未来化学賞、2018年Grand Prix of the Fondation de la Maison de la Chimie など多数受賞。2019年学士院会員。新規多孔性材料であるMOF研究の先駆者であり、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の吸着など広範な未来用途に用いられる可能性がある新規材料、多孔性配位高分子(PCP) (または有機一金属構造体(MOF))を開発した。

## 北川 進

京都大学高等研究院 特別教授  
物質一細胞統合システム拠点 拠点長



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

炭素資源およびエネルギー資源として重宝してきた石炭、石油や天然ガスはいずれ尽きる。地下資源代替として、ユビキタスな物質の利用(例えば空気や河川、海の水)が究極である。実現すれば日本はもはや資源のない国とは言わないであろう。そのためには気体を自在に操作する科学の創成、その技術の発展が不可欠である。東洋では、「仙人は霞(水蒸気、空気)を食つて生きる」と言われる。まさに空気、水を原料として身の回りのものができる未来、私たちが仙人となることはあながち空想ではないようと思える。

Category  
自然科学  
05  
後期

# 尊厳ある生を支える緩和ケア

TAMURA Keiko

「その人である」とことへの支援  
重篤な病を患う人の

## 講義概要

わが国の緩和ケアは、これまでがん医療を中心に発展してきました。しかし、現在では、緩和ケアはがんだけではなく、末期心不全や呼吸不全、腎不全など重篤な病を患う人にも適用されるようになります。緩和ケアは、身体的・精神的症状の軽減を主とする症状マネジメントに焦点があてられることがほとんどですが、その本質は病むことや死と向かいあうことを余儀なくされることに苦悩し、これから的人生をどう生きるかについて思い悩む人に寄り添い、一緒に考えていくことがあります。病むことや死と向かいあうことなど人としての根源的な苦悩(スピリチュアルペイン)について、互いに聴き、聴きあう「対話」を通して考えてみましょう。

## 田村 恵子

京都大学 名誉教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

緩和ケアの本質は、究極の孤独ともいえる状況で苦悩する人に寄り添い続け、一人ぼっちにしないことです。特に、スピリチュアルケアは人生の旅路を辿る人にどう寄り添うか、どのような寄り添いが不安や恐怖を和らげられるかについて探求する営みです。これまで、このような問いは宗教や哲学が取り組むべき課題とされてきました。しかし、スピリチュアルケアが浸透することで、その人の全人的な苦悩が和らぎ、死は生と一緒にあります。死を含む生に焦点があたるようになり、人は何を大切にして生きるかについての探求を始めています。死は単に生理的な出来事ではなく、生にとり不可欠であることが認識されるようになります。

### Profile

1996年聖路加看護大学大学院看護学研究科修了。1997年がん看護専門看護師認定を取得。わが国における末期がんに対するホスピスケアの草分けである大阪市・淀川キリスト教病院で1987年より27年間務め、約6000名を超える看取りに向き合う。2006年大阪大学大学院医学系研究科修了(医学博士)。2014年1月より京都大学大学院医学研究科緩和ケア看護学分野教授に就任。2023年4月より現職。2015年7月より、地域で生活するがん患者や家族、市民が対話を通じて聴きあい、生きる知恵や支え合う力を育む市民活動「ともきいき京都」を創始し、ケアリング・コミュニティづくりを目指している。ホスピスでがん患者を最期まで看取り、家族の看護にも取り組む姿がNHK「プロフェッショナル仕事の流儀」で2008年に放映された。代表的な著書に『余命18日をどう生きるか』(朝日新聞出版)『看護に活かすスピリチュアルケアの手引き第2版』(青海社)、『共に生きるスピリチュアルケア』(創元社)などがある。

Category  
自然科学  
06  
後期

# 有人宇宙活動

D01 Takao

人類の宇宙展開は何をめざすのか

## 講義概要

1961年ガガーリンによる人類初の有人宇宙飛行以来、宇宙は人類にとっての進出可能な新世界となった。日本の『第一期有人宇宙活動』は、1985年に国際宇宙ステーション計画への参加決定及び第一次材料実験に参加する日本人宇宙飛行士の選抜により始まった。日本は短期有人宇宙ミッションを通して、宇宙実験技術、ロボットアーム操作技術、船外活動技術など有人宇宙活動に必須な技術を獲得した。『第二期有人宇宙活動』は、2008年「きぼう」日本実験棟を宇宙ステーションに取り付けるミッションを契機に始まった。日本人宇宙飛行士による長期ミッションが開始され、宇宙飛行士訓練、有人宇宙施設の運用、宇宙貨物船の飛行などの技術を獲得した。日本そして世界の有人宇宙活動は何をめざし、私たちはどこに行こうとしているのだろうか。

## 土井 隆雄

京都大学大学院総合生存学館(思修館) 特定教授  
宇宙飛行士



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

靈長類の祖先がかつて森林からサバンナへ進出したことが人類進化を誘発したように、地球を離れ宇宙をめざす有人宇宙活動は進化の一形態とも考えられる。そう遠くない未来、人類は宇宙空間をも居住空間とし、そこに新たな社会を創造するだろう。私たちは、今、宇宙を切り開く有人宇宙活動のための新しい総合科学を「有人宇宙学」と名付けることにしよう。それは、人類が宇宙に展開していくことを記述できる学問である。有人宇宙学の創出は、「ソーシャル・ハビタビリティ(人間社会の存在可能条件)」という宇宙に持続可能な人間社会を構築するための新しい指標の確立・体系化を可能にする。「ソーシャル・ハビタビリティ」は、物理的・生化学的条件のみでなく、技術やそこに居住する人類のコミュニティの制約条件によって左右される社会存在の限界を定量的に決定する新たな指標である。

### Profile

1954年、東京生まれ。1983年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。2004年、ライス大学大学院博士課程修了。工学・理学博士。1997年、スペースシャトル「コロンビア号」に搭乗し、日本人として初めての船外活動を行う。2008年、スペースシャトル「エンデバー号」に搭乗。ロボットアームを操作し、日本初の有人宇宙施設「きぼう」日本実験棟船内保管室を国際宇宙ステーションに取り付ける。2009年から2016年にかけて、国連宇宙部で国連宇宙応用専門官として宇宙科学技術の啓蒙普及活動に取り組む。2016年4月より京都大学宇宙総合学研究ユニット特定教授に就任。2002年と2007年には超新星を発見する。2016年4月より京都大学宇宙総合学研究ユニット特定教授に就任。2020年4月より京都大学大学院総合生存学館(思修館)特任教授、2020年7月より特定教授。

Category  
自然科学  
07  
後期

# 潜水目視調査から考える海の未来

MASUDA Reiji

多様性とつながり

## 講義概要

京都府北部の舞鶴湾で、毎月2回の潜水調査を2002年から継続している。海の中にも四季折々の変化があるとともに、温暖化の傾向も見てとれる。加えて、高浜原子力発電所に近い福井県の高浜町音海(おとみ)では、2004年から継続して潜水し、原発の稼働中は冬にも南方種の優占する様子を観察してきた。原発の抱える問題について考えさせられるとともに、温暖化の進んだ50年先の日本海の一つの姿を見た気がした。さらに、気仙沼市舞根湾では、2011年5月から継続して潜水している。津波後に回復してきた海の生物たちには、生態系の持つ強靭さを教わった。海の中には多様な生物が生息しており、これらがどのようにつながっているかを理解することが、管理と保全の要と考えている。

## 益田 玲爾

京都大学 フィールド科学教育研究センター  
舞鶴水産実験所 教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

人類は有史以前から海の恵みに大きく依存してきた。この先の人類の歩みにも、海洋のもたらす恩恵は不可欠であろう。海を直接観察して得られる知見は、海が持つ生産性を理解し、これを適切に管理するまでの示唆を与えてくれる。海洋生物資源の管理は、我々はどういう魚を食すべきか、という問題でもある。そこで、魚の食べ方について提案することで、生物資源の利用を、自分の周りから変えたいと思っている。一方で、潜水で得られた着想をもとに、海の生物を飼育して観察し、行動のからくりをさぐる「魚類心理学」的な研究も進めている。魚類の行動観察で得られた知見には、ヒトの行動理解に通じるものもあるかもしれない。

### Profile

1965年、横浜市に生まれ、以後首都圏・関西・名古屋の大都市圏を2年ごとに転居。1985年、静岡大学理学部生物学科入学。ダイビング部に入り、海の生物について幅広く学ぶが、これが過ぎて留年。1990年、東京大学農学系研究科に進学し、海洋研究所にて塚本勝巳教授の指導を受け、シマアジの群れ行動について研究。1996年から2年間、日本学術振興会海外特別研究員としてスコットランドのダンスタッフネージュ海洋研究所に留学し、ニシンの行動について研究。1998年、ハワイのオーシャニック・インスティテュートに研究員として就職。魚類の行動研究を栽培漁業に応用する過程で、魚類の学習能力を調べる実験に着手。2000年4月、京都大学水産実験所に助手として着任。2003年助教授、2014年舞鶴水産実験所長、2020年教授。趣味は、ダイビング、ランニング、テニス、料理、ピアノ。舞鶴水産実験所には、保育園児や小学生からシニアまで、幅広い年齢層の方が訪れるため、それぞれに対し、潜って見てきた魚の話や魚の食べ方の話をしている。

Category  
自然科学  
08  
後期

# 老年病を考える 免疫システムから

MINATO Nagahiro

高齢化社会—老化の生理と病理をめぐって

## Profile

医学博士(京都大学)。専門は免疫学。1975年京都大学医学部卒業。米国アルバートAINシュタイン医科大学研究員、自治医科大学内科助教授等を経て、1992年京都大学医学部教授。2010年京都大学大学院医学研究科長・医学部長、2014年京都大学理事・副学長、2017年よりプロボストを務めた後、2020年10月より第27代京都大学総長。免疫細胞生物学の多彩な基礎研究を展開、220編余の英文原著論文を発表。2018年度ノーベル生理学・医学賞受賞者本庶佑教授の共同研究者として新しいがん免疫療法の開発にも貢献。2014年JCA-CHAAO Award、2016年創薬科学賞、2018年岡本国際賞など受賞。

## 講義概要

老化の定義はむずかしいが、生物には種に固有の寿命(ライフスパン)があり、その時間軸に基づく個体の変化として考える限りそれは生理である。他方、加齢に伴い諸組織の機能障害が病的に顕在化することがあり、加齢随伴疾患(老年病)と総称される。加齢に伴い最も大きな質的変容を示す組織は免疫システムであり免疫老化といわれる。免疫老化自体は免疫システムの恒常性維持のために不可避の生理プロセスだが、近年これが様々な老年病発症の重要な素因となっていることが示唆されてきている。本講義では免疫システムの視点から、最新の知見に基づいて老化は生理か病理かというむずかしい問題にアプローチし、議論を深めたい。

※講義では、内容が一部変更になる可能性があります。

## 湊 長博

京都大学 総長



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

人口の高齢化の進行は、いまや地球上のほぼ全ての国の不可避的現象である。特に日本はその先陣をきつており、2050年の老人人口(65歳以上)の割合は、35%以上と予測されている。この社会全体への影響は甚大である。ひとつは社会経済の仕組みそのものへの影響で、抜本的な再構築を余儀なくされるであろうし、同時にこれに伴い、各年代の個々人の生活様式も不可避的に大きな変容を迫られることになろう。このような背景の中で、老化の生物学と老年病についての理解を深めることは、それへの社会の対応を考える上で、単なる医学を越えた本質的な課題と考えられる。私たちは人間の生理と病理の境界で多くの困難な決断と合意を迫られることになるだろう。

Category  
自然科学  
09  
後期

# 脳のネットワーク

WATANABE Dai

脳の動作原理の解明に向けて

## 講義概要

生物を取り巻く環境は、一定ではなく時々刻々と変化する。したがって生命の危険につながる外界の変化に対し迅速に対応する能力は、生物にとって極めて重要である。環境は多種多様な要因が複合的に作用するため、その変化は複雑であり正確に予測することは困難である。生物はこのような不確定な未来へ対処する情報システムとして脳を発達させてきた。脳は、神経細胞から構成されるネットワークであり、その動作を介して、情報を収集し、統合的に分析を行い、柔軟に意思決定を下すことで、危機を回避しようとする。しかもこの神経細胞のネットワークは、自己組織的にアップデートし、適応的に能力を高めることができる。本講義では、脳が神経細胞のネットワークであるという観点から、脳の本質について考察し、さらにその病態解明や応用に向けたアプローチについて理解を深める。

## 渡邊 大

京都大学大学院医学研究科 教授



世の中をどのように変えるのか、  
どんなインパクトがあるのか

脳のネットワークの研究が進展することで、生物学や医学にとどまらず、様々な自然科学領域に波及効果があり、その発展に寄与する。脳疾患の診断・治療法の開発、革新的なロボット技術や人工知能を可能にする情報テクノロジーの創出など、社会や経済の発展につながると期待される。さらに「人間とは何か」という根源的な問いに迫るためにも、人間らしい考え方や心の基盤となる脳の動作について理解することは重要であり、人文・社会科学の広い領域にも資することが期待される。

### Profile

1990年 京都大学医学部医学科卒業。1997年 京都大学大学院医学研究科博士課程修了(医学博士)。1997年 京都大学医学部助手、2003年 米国カリフォルニア工科大学博士研究員。2005年 大阪バイオサイエンス研究所システムズ生物学部門副部長を経て、2006年 京都大学大学院生命科学研究科認知情報学講座・医学研究科生体情報科学講座教授兼担。2014年より医学研究科生体情報科学講座教授専任。

Category

複合領域

01

後期

# 大切な問い合わせに向き合う 『問い合わせのデザイン』

SHIOSE Takayuki

埋没させるも「問い合わせ」し  
多样性な個を活かすも

## 講義概要

「ロボットは意識を持ちうるか?」「社会がなくても心は存在するか?」など、わたしたちをより深い思考の海に誘う「問い合わせ」とはどのようなものか。多くの場合が「大切な問い合わせ」を無自覚にはとらえているにもかかわらず、向き合い方がわからないがゆえに塩漬けにしてしまう。多様性を活かし、一人一人の個の動機と経験を編み合わせたチームとして牽引するような次世代リーダーシップには、組織メンバーの心を揺り動かすような核心を突いた問い合わせの投げかけが欠かせない。ダイバーシティの重要性を頭で理解しているとは言いつつも、腑に落ちないままでは成員の士気を高めることはできない。

本講義では、問い合わせのデザイン手法や実例とから、受講生各自の専門領域で接する課題と向き合い、所属する組織をより創造的な対話関係を持続できるようなコミュニケーションデザインの習得を目指す。

## 塩瀬 隆之

京都大学総合博物館 准教授



## 世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

社会も組織もスイッチ一つでは何も変わらない。しかし、その成員となる個一人一人が変わることが、大きな変革の種となる。アイデアの萌芽がすでにあったとしても、同じ成員が、同じ会議の方法で、同じ評価方法を続ける限りは社会変革に結実しない。解決策は特別な才能に求めるのではなく、多様な個が埋没してしまう組織の仕組みをよく理解し、確かな観察眼と精緻な論理的思考を組み合わせてその構造を丁寧に紐解くことである。

### Profile

京都大学工学部精密工学科卒業、同大学院工学研究科修了。機械学習による熟練技能継承支援システムの研究で工学博士。ATR 知能ロボティクス研究所、慶應義塾大学SFC 研究所客員研究員など併任。京都大学大学院情報学研究科助教、京都大学総合博物館准教授を経て2012年6月退職。同7月より経済産業省産業技術政策課 課長補佐(技術戦略)。2014年7月京都大学総合博物館准教授に復職。NHK E テレ「カガクノミカタ」番組制作委員。日本科学未来館“おや?”っこひろば総合監修者。平成29年 文部科学省中央教育審議会委員(数理探究)、平成30年より現在 経済産業省 産業構造審議会イノベーション小委員会委員、若手ワーキング座長、特許庁知財創造教育調査委員、文化庁伝統工芸用具・原材料調査委員、日本医療研究開発機構プログラムオフィサー、令和2年岐阜市教育委員会 不登校特例校設立準備アドバイザー、2025大阪・関西万博日本館基本構想有識者委員会座長ほか。平成29年度文部科学大臣表彰・科学技術賞(理解増進部門)、日本の人事部「HRアワード2021」書籍部門最優秀賞ほか受賞多数。著書に、『問い合わせのデザイン 創造的対話のファシリテーション』(学芸出版社、2020)、『未来を変える 偉人の言葉』(新星出版社、2021)

Category  
複合領域  
02  
後期

# 「ごみ」は意外に雄弁だ。

ASARI Misuzu

ごみを通して暮らしや社会を見つめる

## 講義概要

人という人、世の中の誰もが出すと言っても過言ではないのが「ごみ」です。

講義に参加される皆様も、多かれ少なかれ、日々出されているはずです。

少し目を向けて頂ければ、そして、耳を傾けて頂ければ、その不思議や悩み、矛盾や葛藤から、目を離せなくなるでしょう。

そう、何と言っても「ごみ」とは、人間の価値観による産物だからです。

人、場所、時代…様々な要因で変わる「ごみ」の世界に、一緒にして頂けませんか？

ごみは、可能性にもあふれています。この匂い、吸引力、人が生み出す生々しさ…それだけではありません。実は、脱炭素社会の実現に向けた切り札でもあるのです。

## 浅利 美鈴

京都大学大学院地球環境学堂 准教授



## 世の中をどのように変えるのか、どんなインパクトがあるのか

持続可能な社会の構築に向けては、資源循環システムの構築が必須であり、「ごみ」の3R(リデュース・リユース・リサイクル)が行動指針となります。私の所属する研究チームでは、40年以上に渡って家庭ごみ等の組成調査を実施しており、様々な資源循環関連の施策立案の基礎情報を提供してきました。最近は、持続可能な開発目標(SDGs)においても取り上げられている食品ロスや、プラスチックごみ問題などに注目が集まり、解決に向けた研究が急がれています。今後は、脱炭素・炭素中立も念頭においた製品作りや資源循環、サーキュラーエコノミーの構築に向けて、実践も伴う研究展開が求められています。

### Profile

京都大学大学院工学研究科卒。博士(工学)。京都大学環境科学センター助教を経て京都大学地球環境学堂准教授。

「ごみ」が一つの大きな研究テーマ。ごみから見た社会や暮らしのあり方を提案する。また、ごみや3Rの知識を身につけ、行動してもらうことを狙いに、毎年11月に「3R・低炭素社会検定」を実施。「環境教育」や「大学の環境管理」も研究テーマで、京都大学をフィールドに、全員参加型のエコキャンパス化を目指す「エコ～るど京大」や「京都大学超SDGs研究ライトユニット」なども展開。また、ライフワークとして市民への啓発・教育活動にも力を注ぎ、百貨店を会場とした「びっくり!エコ100選」を8年実施。その後の展開として、資源エネルギー問題にアクションを起こす「びっくりエコ発電所」「びっくりエコ研究所」を運営。2019年から「京都超SDGsコンソーシアム」を立ち上げ、地域やフィールドでの実践活動を展開している。2021年には「京都里山SDGsラボ(ことす)」をオープン。

Category

芸術

01

後期

# いけばなの美と哲学

IKENOBÔ Senko

いけばなにみられる日本の美意識と  
精神性を造形から解く

Category

芸術

01

後期

## 講義概要

日本のいけばなは表面的な形や色の美しさに留まらず、植物のいのちの様に美を感じ、また人と自然とを関連づけて捉えるところに、その特徴が見受けられる。いけばなに於けるアシンメトリーな造形から日本の美意識を探り、その背景にある自然観について考える

## 池坊 専好

華道家元池坊 次期家元



### Profile

2015年 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 博士後期課程修了(先端ファイブロ科学専攻)。小野妹子を道祖として仰ぎ、室町時代にその理念を確立させた華道家元池坊の次期家元。日本いけばな芸術協会副会長も務める。いのちをいかすという池坊いけばなの心を通した多彩な活動を展開。2013年にはハーバード大学においてワークショップを、またニューヨーク国連本部において献花を行なう。アイスランド共和国名誉領事。

Category

芸術

02

後期

# 能面が私達に語りかけてくるもの

KONGOU Hisanori

能面を通して、世界最古の演劇「能」の魅力に迫る

## Profile

1951年、二十五世宗家金剛巖の長男として京都に生まれる。幼少より、父・金剛巖に師事。1998年9月能楽金剛流二十六世宗家を継承する。2003年5月金剛能楽堂を京都御所の西向かいに移転、竣工。重要無形文化財総合認定保持者。

「舞金剛」と呼ばれる華麗で躍動感溢れる金剛流独特の芸風に、「京金剛」といわれる優美で雅やかさが加わった芸風を特徴とし、シテ方五流宗家の中で唯一関西を本拠地とする。金剛流第一回の海外公演であるカナダ・アメリカ公演団長を皮切りに、イタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、ロシアなどでの海外公演も多数行う。

京都市芸術新人賞、京都府文化賞新人賞、京都府文化賞功労賞受賞。京都市文化功労者表彰。第67回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2018年紫綬褒章受章。公益財団法人金剛能楽堂財団理事長。一般社団法人日本能楽会会長。一般社団法人金剛能楽会代表理事。京都市立芸術大学客員教授。

著書に『金剛家の面』、『金剛宗家の能面と能装束』がある。



小面



増女



孫次郎



羽衣

## 金剛 永謹

能楽金剛流宗家



Category  
芸術  
03  
後期

# 樂茶碗はなぜ黒いのか

RAKU Jikinyū

茶碗から見る日本文化のくくり

## Profile

樂家十五代当主。公益財団法人樂美術館 理事長、館長。公益財団法人金剛能楽堂 理事。公益財団法人佐川美術館名誉顧問。京都国立近代美術館評議員、十備会会員。1973年東京藝術大学彫刻科卒業後、イタリア留学ローマ・アカデミアにて学ぶ。1981年十五代吉左衛門襲名。1987年プリンストン大学ヴィジティングフェローシップ招待渡米。1992年通産省「感性社会研究会」委員。1994年淡交ヴィエンナーレ審査委員。1995年土岐市「現代茶陶展」審査委員。2007年佐川美術館「樂吉左衛門館」の建築設計創案・監修を行う。2019年7月8日をもって樂家当主を長男に譲り「直入」と改名、戸籍を変更する。田部美術館大賞「茶の湯造形展」審査委員。1987年プリンストン大学・ヴィジティング・フェローシップ受賞(アメリカ・プリンストン大学)、日本陶磁協会賞、1988年京都市芸術新人賞(京都市)、1990年京都府文化賞奨励賞(京都府)、1991年京都美術文化賞(中信美術奨励基金)、1992年レオンドー賞(イタリア・ファエンツァ市・イ・フィオーリ)、日本陶磁協会賞金賞、1993年MOA 岡田茂吉賞優秀賞(MOA 美術館)、1997年第1回織部賞(岐阜県)、1998年第40回毎日芸術賞(毎日新聞社)、2000年フランス芸術・文化勲章シュヴァリエ受章(フランス政府)、京都府文化功労賞(京都府)、第3回茶道文化賞(裏千家今日庵)、第15回MOA 岡田茂吉賞大賞(MOA 美術館)、京都市文化功労賞(京都市)、京都府文化賞特別功労賞(京都府)など受賞多数。2015年「RAKU: THE COSMOS IN A TEA BOWL」展(国際交流基金共催)をロサンゼルス カウンティ美術館、サンクトペテルブルク・エルミタージュ美術館、モスクワ・ブーシキン美術館にて開催。2016年「茶碗の中の宇宙 樂家一子相伝の芸術」展 京都国立近代美術館、東京国立近代美術館。「無限の宇宙一掌中を超えて」京都国立近代美術館コレクション展にて企画・出品など、その他多数。

主な著書に「『樂吉左衛門』陶VOL93」京都書院(1993年)、「茶道具の世界 樂茶碗」淡文社 <共著・責任編集>(2000年)、「茶道具の世界 和物茶碗」淡文社 <共著・責任編集>(2000年)、「樂焼創成・樂ってなんだろう」淡文社(2001年)、「茶室をつった 5年間の日々を書き綴った建築日誌」淡文社(2008年)、「ちゃわんや 二人の息子と若き人々へ」淡文社(2012年)、「定本 樂歴代」淡文社(2013年)、「月と華 宗入と乾山」元禄を生きた雁金屋の従兄弟ども」樂美術館(2014年)、「RAKU: A Legacy of Japanese Tea Ceramics」共著・樂篤人 青幻舎(2015年)、「茶碗の中の宇宙」ロシア語版 著書。共著・エルミタージュ美術館「ブーシキン美術館編(2015年)、「光悦追遡」京都新聞社朝刊連載 1年間 26回(2015年)、「Darkness and Light」共著・樂雅臣(2016年)、「光悦考」淡文社(2018年)、「観じる名碗」世界文化社(2018年)、「玉水焼—歴代の作品とその歴史—」淡文社(2021年)、その他著書多数。

## 樂 直入

樂家十五代当主



### 講義概要

小学生が樂美術館をおとづれると、かならずする質問があります。「ここには、どうして、黒いお茶碗ばかりならべているの~?」「おじさんも黒い茶碗つくっているのか?」「おじさんは、色きらいなん?黄色とかピンクとか、緑とか」この本質的で素朴な問い合わせに、どの様に答えればよいのでしょうか。「黒色は千利休と言うえらいお茶人の＜侘び茶＞の精神なの」と答えるべきでしょうか。それとも、「黒はすべての色を含んでいる」とでも…。

この子供達の問いは日本文化の根底につながっています。

右に掲載の茶碗は「黒」ならず「白」。近作「White Rook」とよばれている茶碗。

「黒」「白」「赤」と、それはたんなる「色」ではない深い意味を負っています。



焼白巖石茶碗 銘 晚 2022年制作

発行者：京都大学ELP事務局

発行日：2023年4月

本書に記載されている内容を無断で転用・転載することを禁じます。



**京都大学**  
KYOTO UNIVERSITY

## 京都大学ELP事務局

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町1 橘会館内

TEL:075-753-5158 / FAX:075-753-5154

URL:<http://www.elp.kyoto-u.ac.jp/>

Email:[info@elp.kyoto-u.ac.jp](mailto:info@elp.kyoto-u.ac.jp)